

長岡京右京北辺四坊八町跡・  
上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一四―一二

長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



長岡京右京北辺四坊八町跡・  
上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、道路建設工事に伴う長岡京跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年3月

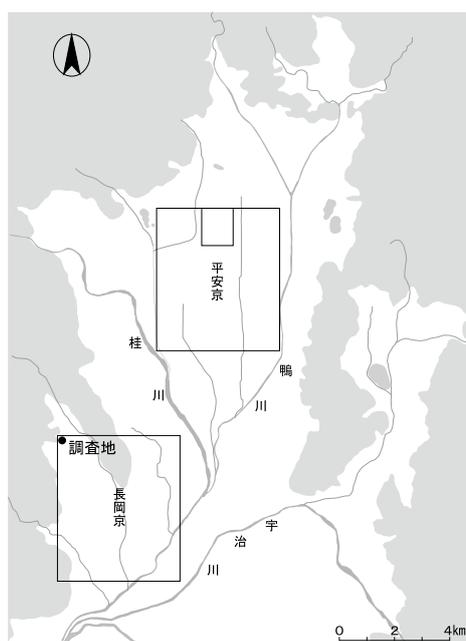
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |   |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名  | 長岡京跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳（文化財保護課番号 01NG238）<br>長岡京右京第1100次調査 |
| 2 調査所在地  | 京都市西京区大原野上里南ノ町地内                                      |
| 3 委 託 者  | 京都市 代表者 京都市長 門川大作                                     |
| 4 調査期間   | 2014年10月22日～2014年12月26日                               |
| 5 調査面積   | 1,262㎡  |
| 6 調査担当者  | 東 洋一・津々池惣一・布川豊治・松吉祐希・南 孝雄                             |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「石見」を参考にし、作成した。               |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）                        |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度  |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。                     |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                                  |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                                   |
| 13 本書作成  | 東 洋一・津々池惣一・布川豊治・松吉祐希・南 孝雄                             |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。             |

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺 構	7
4. 遺 物	21
(1) 遺物の概要	21
(2) 埴輪類	21
(3) その他の遺物	30
5. ま と め	31

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	西調査区全景（北から）
		2	東調査区全景（北から）
図版2	遺構	1	埴輪列 埴輪3～7（北から）
		2	埴輪12及び西調査区東壁（北西から）
図版3	遺構	1	埴輪列・集石1・2（西から）
		2	埴輪列・集石2西部（北から）
図版4	遺構	1	埴輪列・集石2東部（北から）
		2	埴輪列・集石3（北西から）
図版5	遺構	1	集石2埴輪片混入状況（北から）
		2	埴輪列掘形・集石2完掘状況（東から）
図版6	遺構	1	埴輪16（北から）
		2	埴輪16・溝1（北東から）
		3	溝1埴輪片散布状況（北から）
		4	溝1（北から）

- 図版7 遺構 1 土坑1 (北から)  
 2 土坑2 (北西から)  
 3 落込み1 (南東から)
- 図版8 遺物 円筒埴輪
- 図版9 遺物 1 円筒埴輪 弧帯文  
 2 円筒埴輪 円形透し・突帯剥離痕
- 図版10 遺物 1 朝顔形円筒埴輪  
 2 形象埴輪
- 図版11 遺物 形象埴輪

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1 : 10,000)	1
図2	調査区配置図 (1 : 400)	2
図3	西調査区調査前全景 (南東から)	3
図4	西調査区作業風景 (東から)	3
図5	東調査区調査前全景 (南から)	3
図6	東調査区作業風景 (北から)	3
図7	明治42年測図地形図 (1 : 10,000)	5
図8	調査区北壁・南壁断面図 (1 : 100)	8
図9	調査区西壁断面図 (1 : 100)、西調査区東壁断面図 (1 : 50)	9
図10	調査区地形測量図 (1 : 300)	10
図11	調査区平面図 (1 : 250)	11
図12	集石1実測図 (1 : 50)	12
図13	集石2東部・集石3上面実測図 (1 : 50)	13
図14	集石2西部上面実測図 (1 : 50)	14
図15	集石2西部下面実測図 (1 : 50)	15
図16	埴輪16実測図 (1 : 40)	16
図17	ピット列1実測図 (1 : 100)	16
図18	溝1及び直上埴輪片散布面実測図 (1 : 100)	17
図19	土坑1実測図 (1 : 40)	18
図20	柱列1・2実測図 (1 : 50)	19
図21	落込み1実測図 (1 : 50)	19

図22	土坑2実測図（1：50）	20
図23	出土埴輪実測図1（1：4）	23
図24	出土埴輪実測図2（1：4）	24
図25	出土埴輪実測図3（1：4）	25
図26	出土埴輪実測図4（1：4）	26
図27	出土埴輪実測図5（1：4）	27
図28	出土その他の遺物実測図（1：4）	29
図29	出土その他の遺物	30

## 表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	21
表3	埴輪観察表	22



# 長岡京右京北辺四坊八町跡・ 上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳

## 1. 調査経過

今回の調査は、京都市建設局道路建設部道路建設課による、都市計画道路3.3.5中山石見線（以下「中山石見線」という）建設工事に伴う発掘調査業務（その2・その3）である。京都市西京区大原野上里南ノ町地内に所在する。当該地は上里北ノ町遺跡と長岡京右京北辺四坊八町跡の範囲内に含まれ、長岡京右京第1100次調査となる。上里北ノ町遺跡は古墳時代から室町時代の遺物散布地である。調査地北側には、直径約30mの円墳で5世紀前葉の築造とされている鏡山古墳（遺跡番号1039）がある。また調査区と鏡山の谷筋には旧山陰道（丹波道）が通っていたと推定されており、現在これを踏襲していると考えられている道路（府道柚原向日線）が存在する<sup>1)</sup>。

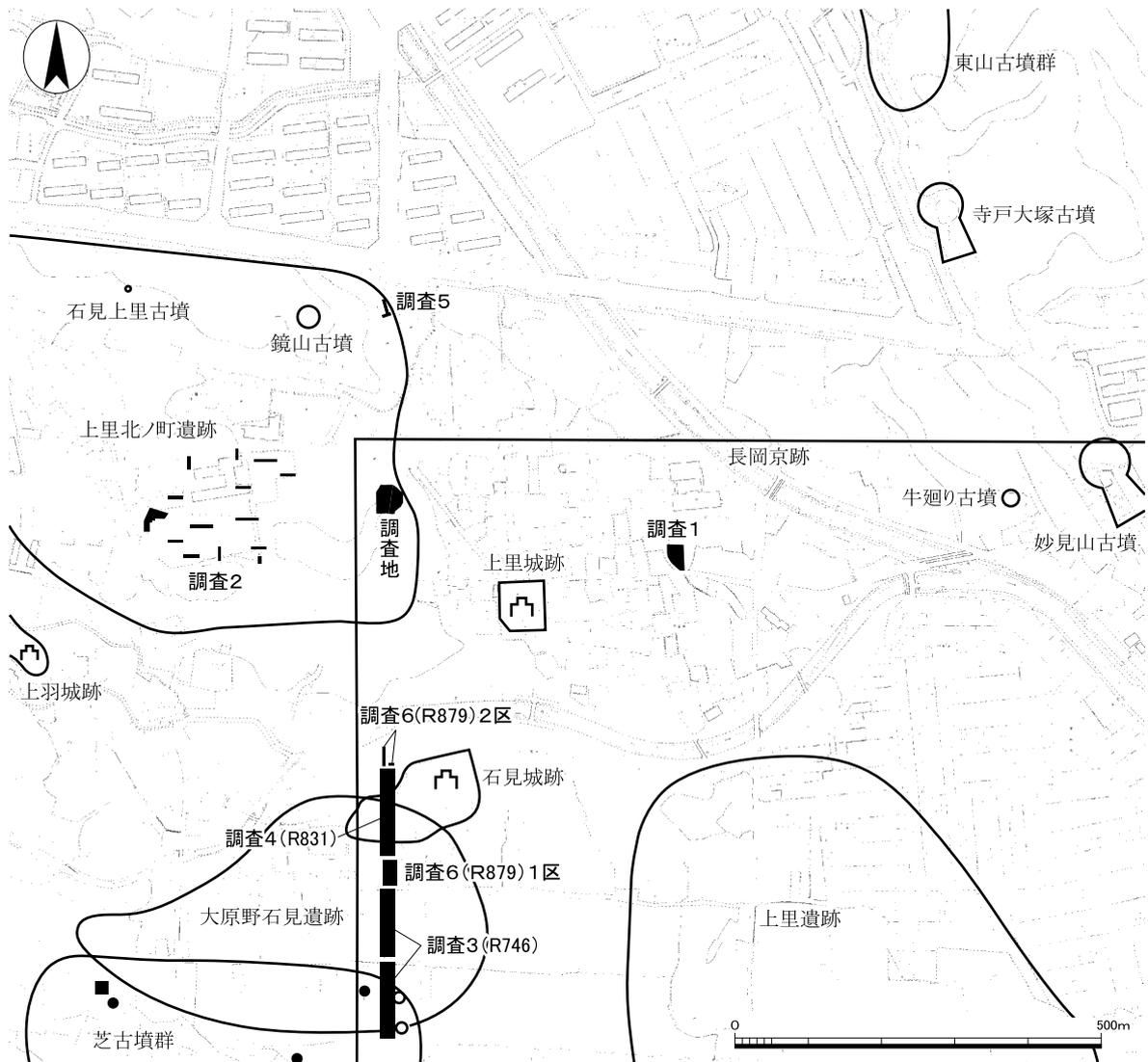


図1 調査位置図 (1 : 10,000)

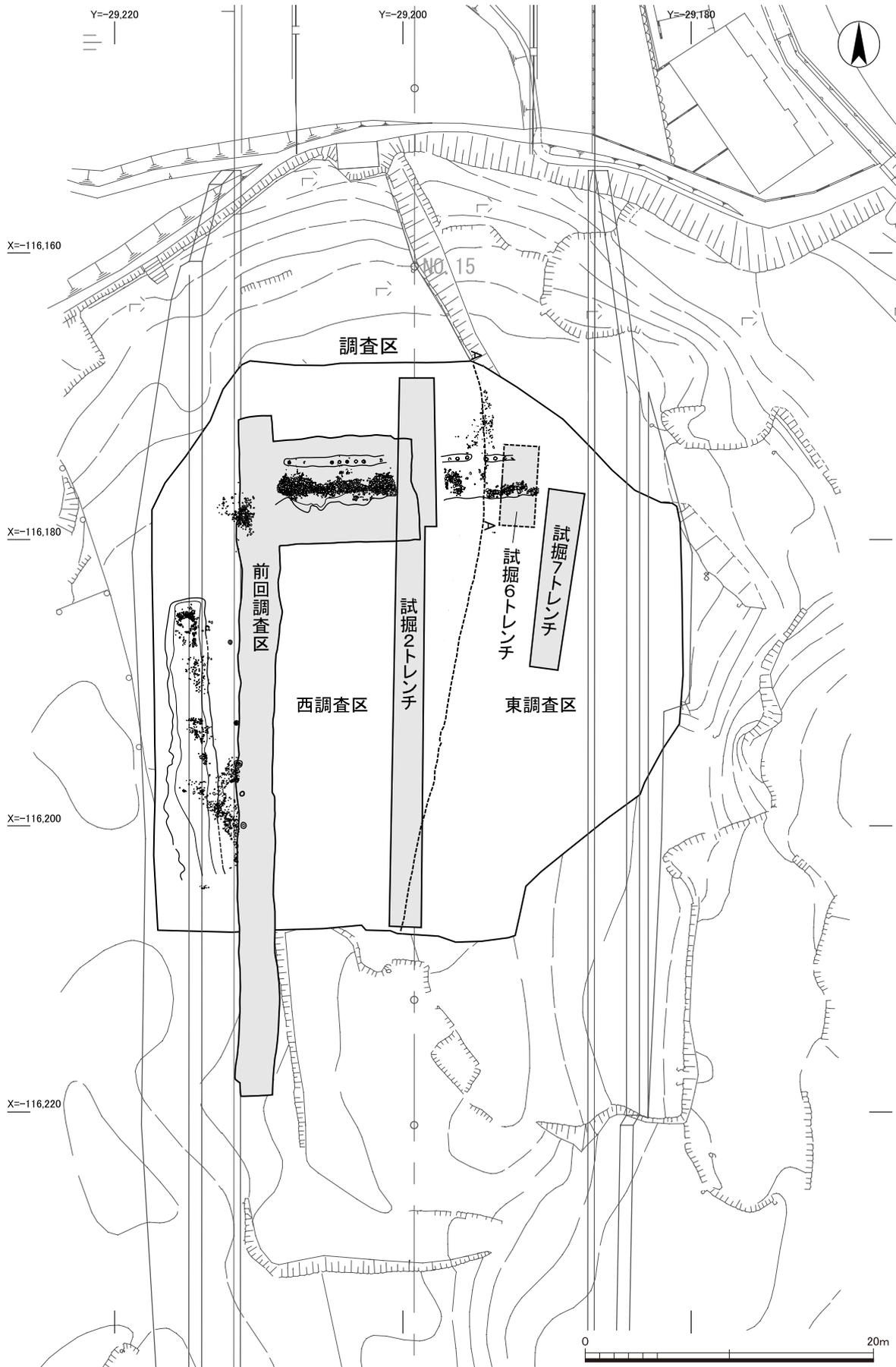


図2 調査区配置図 (1 : 400)

今回の調査に関しては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が、道路範囲内に試掘調査を実施したところ、試掘2・6トレンチで葺石と考えられる集石や円筒埴輪・家形埴輪などを検出した。このことにより、これまで知られていなかった古墳時代前半の古墳が存在することが判明した。そこで、文化財保護課の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、中山石見線道路建設に伴う発掘調査業務（その1）を実施した<sup>2)</sup>（以下「前回調査」とする）。

前回調査では南北方向の幅2m・長さ42mの調査区を設定し、調査を実施した。その結果、トレンチ北部で埴輪片の混じる集石と、この集石から約28m南のトレンチ南部で埴輪片と礫が入る土坑を検出した。このことにより南北28m以上の方墳の可能性が出てきたので、トレンチ北部に拡張区を設けた。拡張区では墳丘北側の平坦面に東西方向の1～1.2m間隔で並ぶ埴輪列4基を検出した。また、埴輪列南側の墳丘北側傾斜面で埴輪片の混じった集石を帯状に検出した。

今回の調査に先立って、文化財保護課では、前回調査と現況地形をふまえ、直径30m前後の方墳と想定し、調査区を設定した。南北40m、東西37mの調査区を設けて全面調査を実施した。工事用道路の用地確保のため調査区を西半部と東半部に分け、西半部から調査を開始し、終了後東半部の調査を行った。両調査区とも最初に重機で地表下0.3～1.5mの竹林盛土部分を除去した。その後の掘削は人力で行った。その結果、竹林造成時に墳丘の大部分は削平されていたが、調査区の北側と西側で地山を削り出した平坦面と墳丘基底部を検出した。



図3 西調査区調査前全景（南東から）



図4 西調査区作業風景（東から）



図5 東調査区調査前全景（南から）



図6 東調査区作業風景（北から）

両調査区ともにそれぞれ、全景写真撮影・実測作業を行い、記録を作成した。特に北側の裾部で検出した集石帯については葺石・葺石裏込め礫の可能性があるので、集石検出時・上層部取り上げ・完掘時の都合3回に分けて慎重に掘り下げて記録した。12月26日にすべての調査を終了した。

調査期間中は、適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、この調査の検証委員である龍谷大学教授の國下多美樹氏、同志社大学准教授の若林邦彦氏の臨検を受けた。なお、12月21日に地元住人を対象とした現地公開を実施し、78名の参加があった。

今回新たに検出した古墳は、文化財保護課によって小字名から「堂ノ上古墳」として登録された。

註

- 1) 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 - 発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告 -』京都市都市開発局洛西開発室 1972年
- 2) 尾藤徳行『長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年

## 2. 位置と環境

### (1) 歴史的環境と立地 (図7)

調査地は北西から南東に流れる小畑川と西から東に流れる善峰川の合流地点の西側にある丘陵上に位置する。調査地の現状は北側が低くなり、北東・東・南東端は深い土取りによって崖となっている。南側は緩やかな傾斜で下がっている。西側は筍栽培による土取りのため凸凹している。現在の地形は筍栽培による造成によるものであり、墳丘の形状をとどめていない。明治42年に測図された地形図<sup>1)</sup>をみれば、調査地は標高60m等高線が東に約100m、南北約160m突出した台形状の平坦地が描かれており、この台地の北東端部に位置している。また、調査地南西側が尾根状に延び、西山連峰になだらかに連なる地形となっている。平坦地の北・東・南は急な傾斜となっており、北西谷底には溜池が描かれている。また、地図が作成された時点で、調査区周辺は竹林となっている。

律令制下では、大和から山陰諸国に出る旧山陰道が調査地北側に通っていたとされる。また、調査地西側には山陰道に設けられた「馬家」が存在したことから、なまって現在の「宇ノ山」に変化したと考えられている<sup>2)</sup>。

調査地の東に位置する小畑川を越えた向日丘陵には古墳時代前期の元稻荷古墳・五塚原古墳・寺戸大塚古墳・妙見山古墳などが存在する。調査地北側に隣接する鏡山には古墳時代中期の鏡山古墳がある。鏡山古墳は直径30mの円墳で、豊富な石製模造品が出土している。今回新たに古墳を

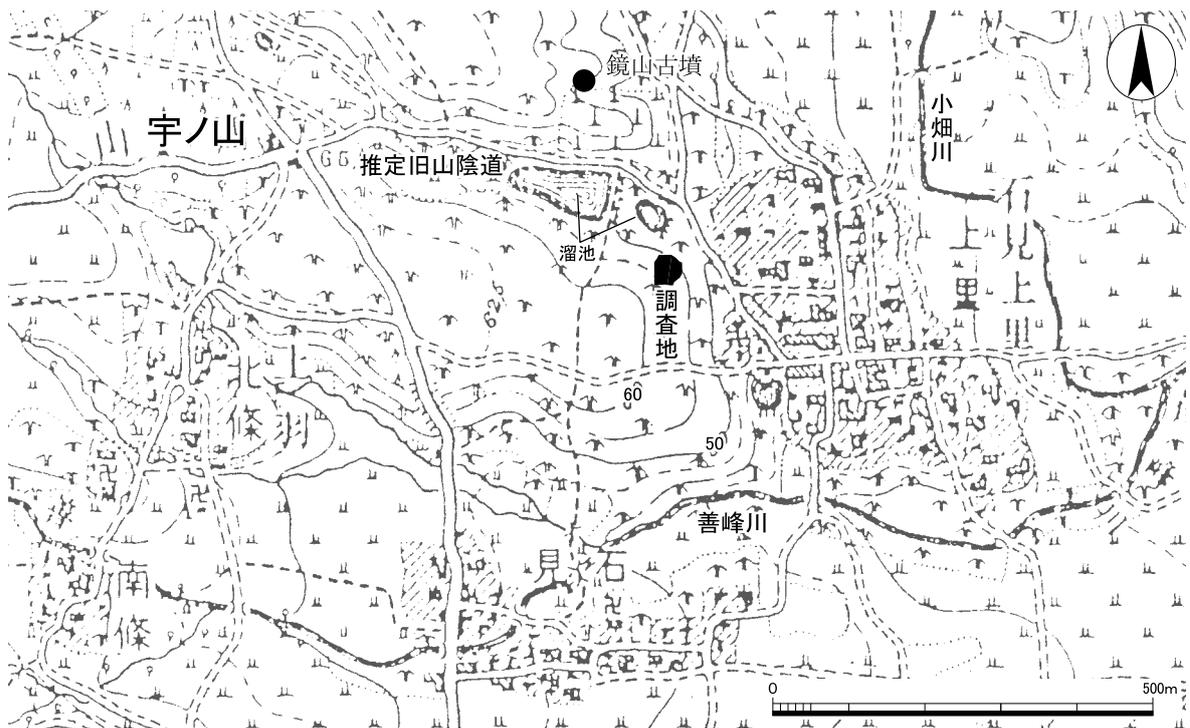


図7 明治42年測図地形図（1：10,000）一部調整

発見した当地は標高60mあり、南東方に桂川・宇治川・木津川と巨椋池が望め、南方には男山と天王山に挟まれた淀川下流域を望むことができる。

近隣の丘陵・台地などでは旧石器時代から縄文時代にかけての石器などが発見されている。また、乙訓地域には縄文の集落や弥生時代以来の集落が発見されており、古墳時代を通じて存続する。山陰道諸国をつなぐ軍事的・交通的な要衝としての位置に墳丘が築かれたことが理解できる。

## （2）周辺の調査（図1）

前回調査を除けば、周辺には、6度の発掘調査事例がある。1989年度の調査<sup>3)</sup>は、竹ノ里小学校分校（現在の<sup>3)</sup>上里小学校）の試掘・発掘調査である。調査地の東側で小畑川の旧流路とともに遺物包含層や溝状遺構を検出した。遺物包含層や遺構からは、6世紀後半から10世紀中頃までの遺物が出土した。古墳時代の須恵器杯身は、完形品で磨滅がほとんどない。1992年度の調査<sup>4)</sup>は、上里中学校（現在の<sup>4)</sup>大原野中学校）の発掘調査である。14箇所<sup>4)</sup>の調査区を設け、確認調査を行った。多くの調査区は遺構面が竹林の土入れに伴う掘削により削平をうけ、明確な遺構を検出することができなかったが、1トレンチでは拡張調査し、中世の南北2間・東西3間以上の掘立柱建物、土坑、溝、柱列などを検出した。遺物は、ほとんどが土器類で、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器がある。溝から出土した土器類には、鎌倉時代の瓦器椀・皿や土師器皿などがある。

その他に、同じ中山石見線道路新設工事に伴い、調査3～6<sup>5)</sup>が行われている。2002年度の調査3<sup>5)</sup>では、縄文時代後期から弥生時代前期、古墳時代前期の流路などを検出している。また、長岡京の一条条間南北側溝や鎌倉時代の集落跡などが検出されている。2004年度の調査4<sup>6)</sup>では、縄文時代か

ら古墳時代後期の竪穴住居、古墳時代後期から長岡京期の建物などが検出されている。また、鎌倉時代から室町時代の石見城に関連する建物など多くの遺構が検出された。縄文土器や弥生時代の石槍・石鏃なども出土している。2005年度の調査<sup>7)</sup>は、鏡山古墳のある丘陵の北東の裾部から小畑川へと低くなる段丘の接する地点である。調査では、近世の遺物包含層の検出に留まり、他の時代の遺構は検出できなかったが、平安時代から江戸時代の遺物が数点出土した。2006年度の調査<sup>8)</sup>では、古墳時代の土坑、長岡京期の建物、鎌倉時代から室町時代の土坑、江戸時代の建物、土坑、井戸などを検出している。

#### 註

- 1) 大日本帝國陸地測量部『大原野』二万分一地形圖；京都近傍20號 1912年
- 2) 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査 - 発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告 -』京都市都市開発局洛西開発室 1972年
- 3) 長宗繁一「長岡京右京一条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4) 加納敬二・永田宗秀「上里遺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5) 百瀬正恒・網 伸也『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6) 南 孝雄・清藤玲子『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 7) 卜田健司『上里北ノ町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2005-11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 8) 能芝 勉・田中利津子『長岡京右京一条四坊十四・十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

現地表面から0.3～1.5mまで筒栽培のための盛土で、調査地四周は筒栽培の土取りによって一部を除き全面にわたって地山まで削平されていた（図8・9）。北側平坦面の北東部と西側平坦面には埴輪片を含んだ墳丘流出土が厚さ約0.1m堆積している。

地山南半部は固く締まった大阪層群を形成する砂礫と粘土の互層からなる。特に深く削平された南西部は白色系の粘土が露出する。地山の北半部は主に砂岩や泥岩系の固く締まった砂礫層によって形成されている。

#### (2) 遺 構

北東部に頂点となる標高60m部分から北に下がる北面斜面と北西に下がる斜面に、標高約59.0m地点にテラス状の平坦面を北側と西側を削り込んで墳丘基底部（標高59m以上）を形成している（図10）。北側の平坦面の幅は5m前後であるが、北西部は削平のため狭くなっている。西側の平坦面の検出幅は約8mで、さらに調査区西外に広がる可能性がある。調査区西壁で現地表から深さ1.5mを測る。また、この西側平坦面に幅約3m、深さ0.3mの南北方向の溝が掘られていた。この溝は調査区南壁を越えて延長するので、西側平坦面も南に延長する可能性がある。

北側の平坦面で東西方向の布掘り掘形に据えられた埴輪列（埴輪1～15）を検出した（図11）。また、西側平坦面でも原位置を保つ埴輪1基（埴輪16）を検出したが、単独の掘形を持つもので、北側に存在した布掘り掘形は検出していない。

なお、調査区南部には平坦面や溝は認められず、墳丘南限を示す遺構は見当たらなかった。

以下、個別の遺構について概説する。

**埴輪列**（図13・15、図版2～5） 調査区北側で東西方向に16m、平均幅0.5m、深さ均0.15mの東西に分かれる2単位の埴輪列掘形に据えられた15基の円筒埴輪を検出した。円筒埴輪には西から順に番号を振った。円筒埴輪は残存していなかったものもあるが、ほぼ0.6m間隔で据え付けられていた。東端は調査区北東部に掘られた大きな現在の攪乱によって失われている。西端も現在の攪乱に壊されている。円筒埴輪は突帯1条目まで残存するものもあるが、多くは突帯以下の底部

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	古墳1基（埴輪列、集石1～3、埴輪16、ピット列1、溝1）	
平安時代末 ～鎌倉時代	土坑1	瓦器椀
時期不明	土坑2、柱列1・2、落込み1	讃岐産瓦

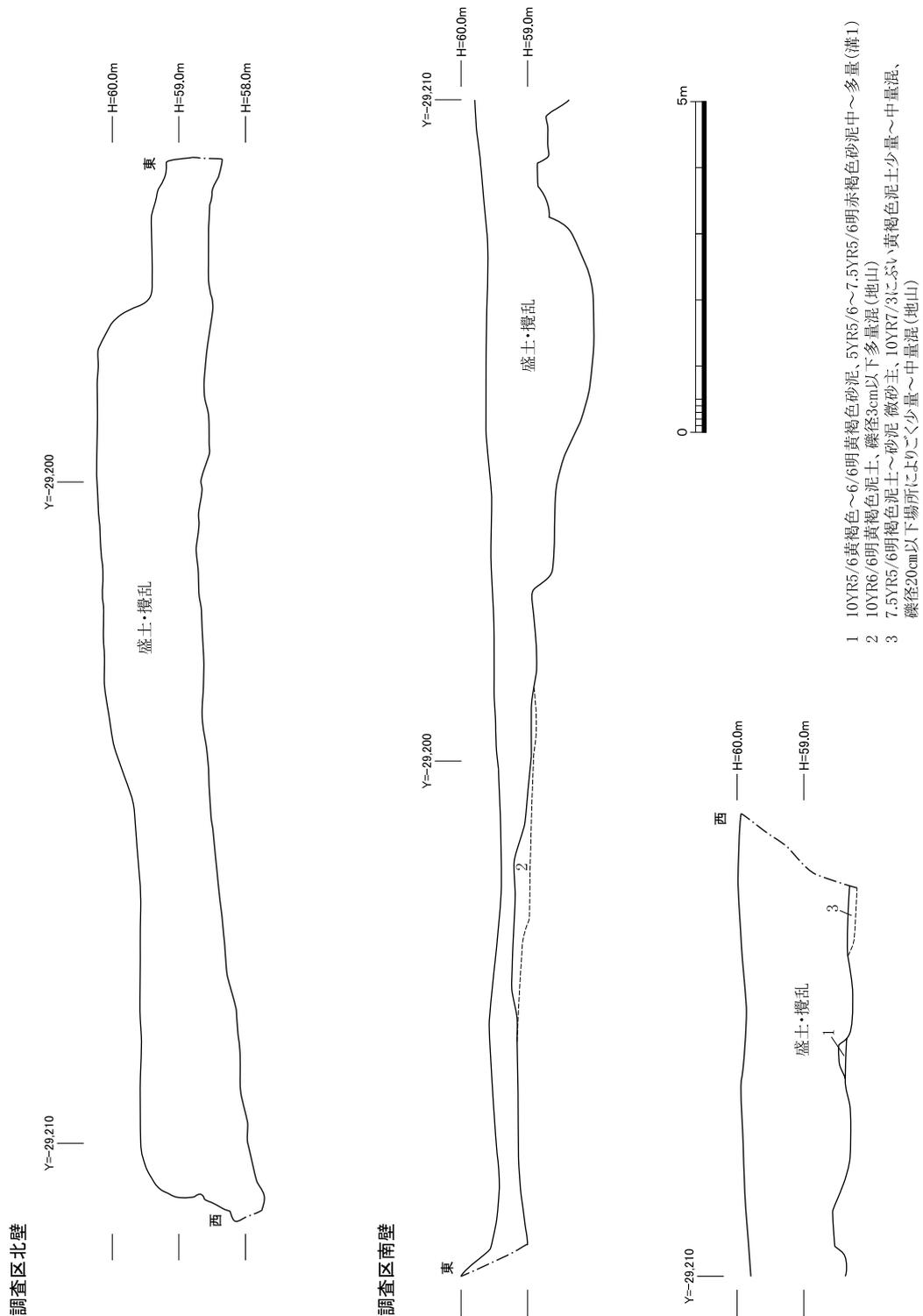
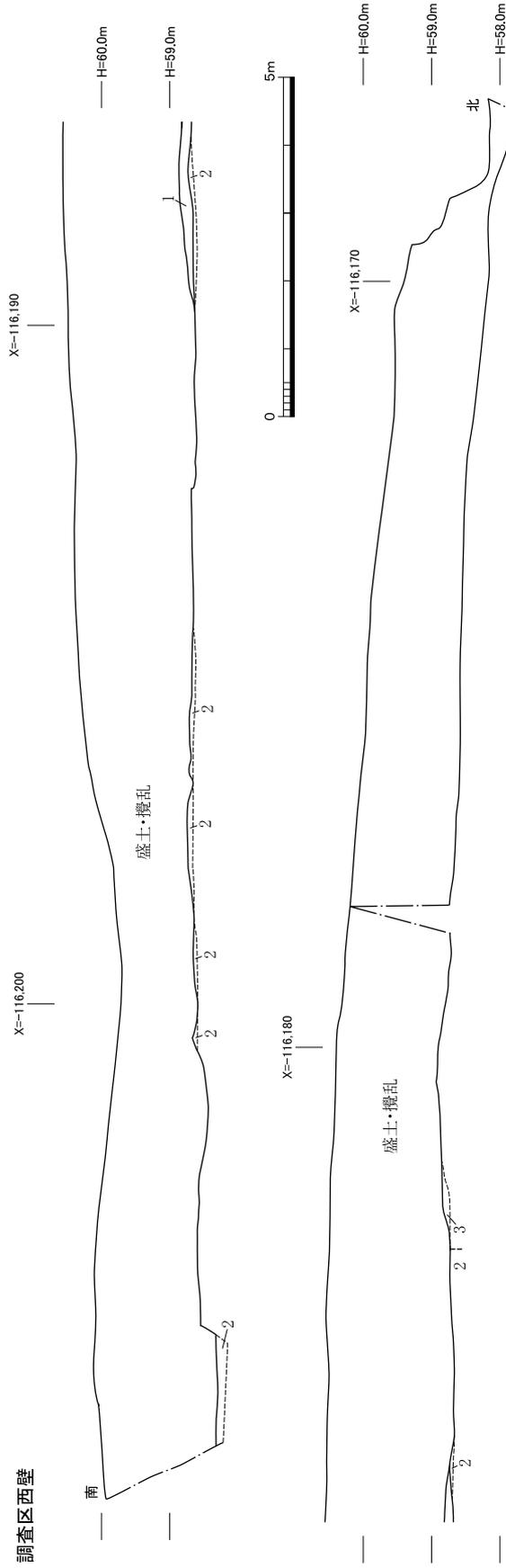


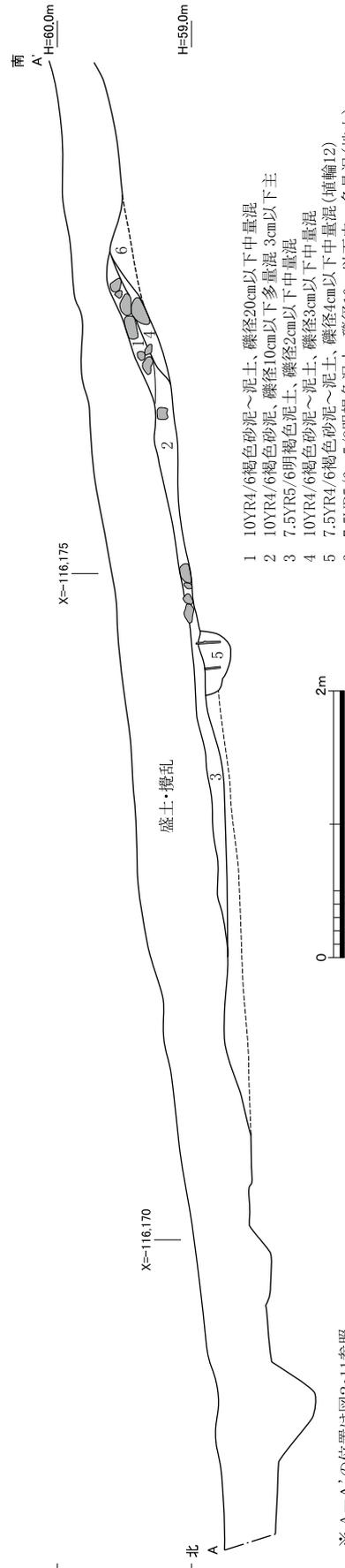
図8 調査区北壁・南壁断面図 (1 : 100)

調査区西壁



- 1 7.5YR5/6明褐色泥土～砂泥、10YR5/6黄褐色泥土少量混、礫径15cm以下少量混(近世以降)
- 2 7.5YR5/6明褐色泥土～砂泥 微砂主、10YR7/3にふい黄褐色泥土少量～中量混、礫径20cm以下少中量混(地山)
- 3 10YR6/6明褐色～5/6黄褐色砂泥 細砂主 混じり礫、礫径15cm以下(地山)

西調査区東壁



- 1 10YR4/6褐色砂泥～泥土、礫径20cm以下中量混
- 2 10YR4/6褐色砂泥、礫径10cm以下多量混 3cm以下主
- 3 7.5YR5/6明褐色泥土、礫径2cm以下中量混
- 4 10YR4/6褐色砂泥～泥土、礫径3cm以下中量混
- 5 7.5YR4/6褐色砂泥～泥土、礫径4cm以下中量混(噴輪12)
- 6 7.5YR5/6～5/8明褐色泥土、礫径10cm以下中～多量混(地山)

※ A-A' の位置は図2・11参照

図9 調査区西壁断面図 (1:100)、西調査区東壁断面図 (1:50)

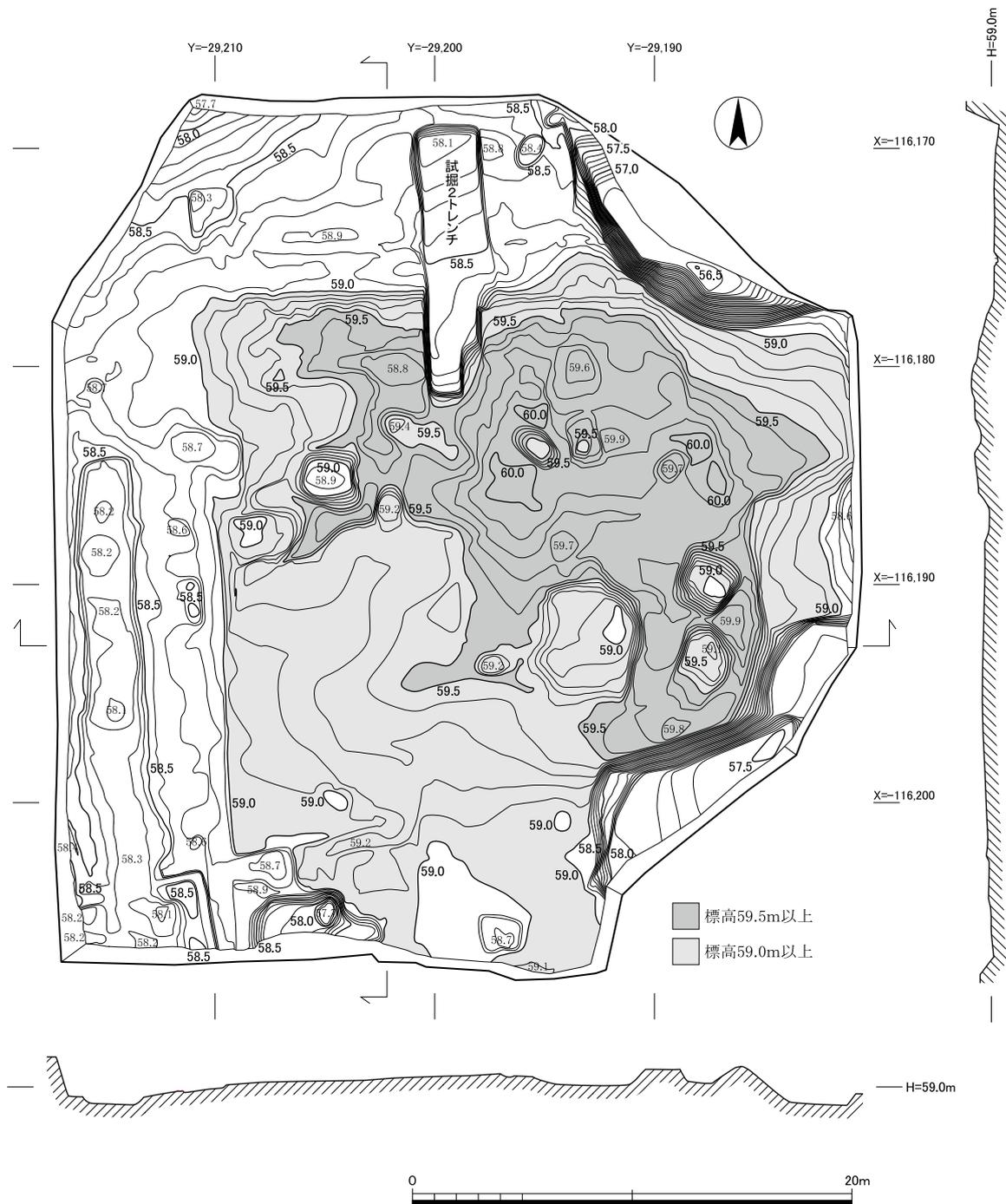


図10 調査区地形測量図 (1 : 300)

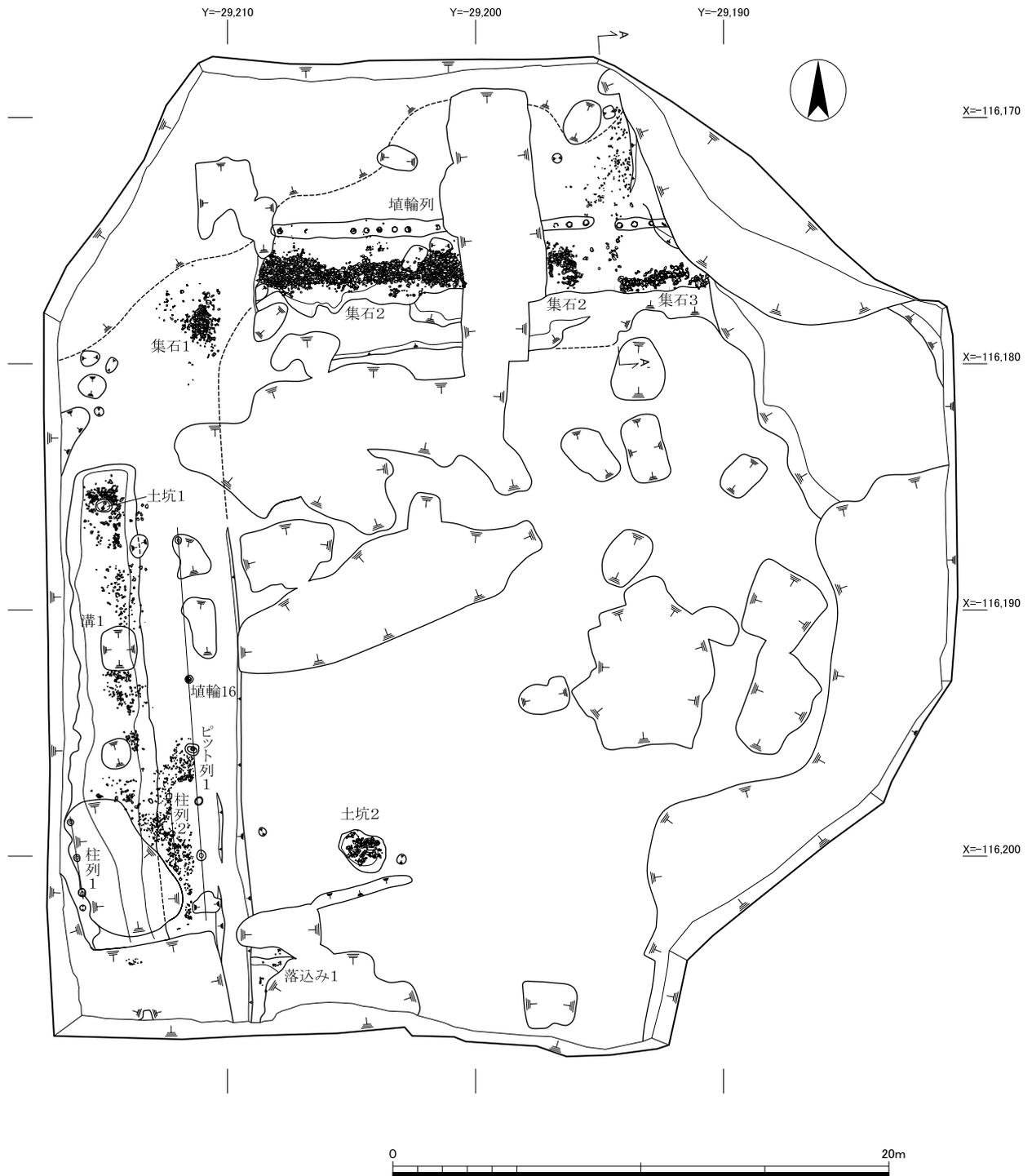


図11 調査区平面図 (1 : 250)

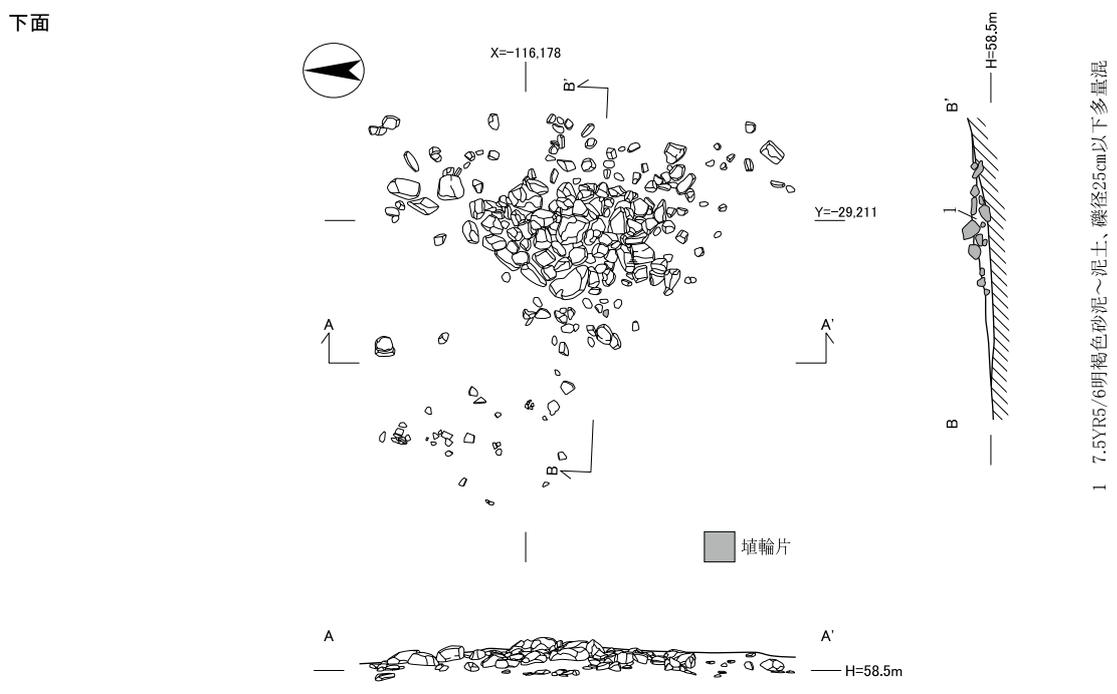
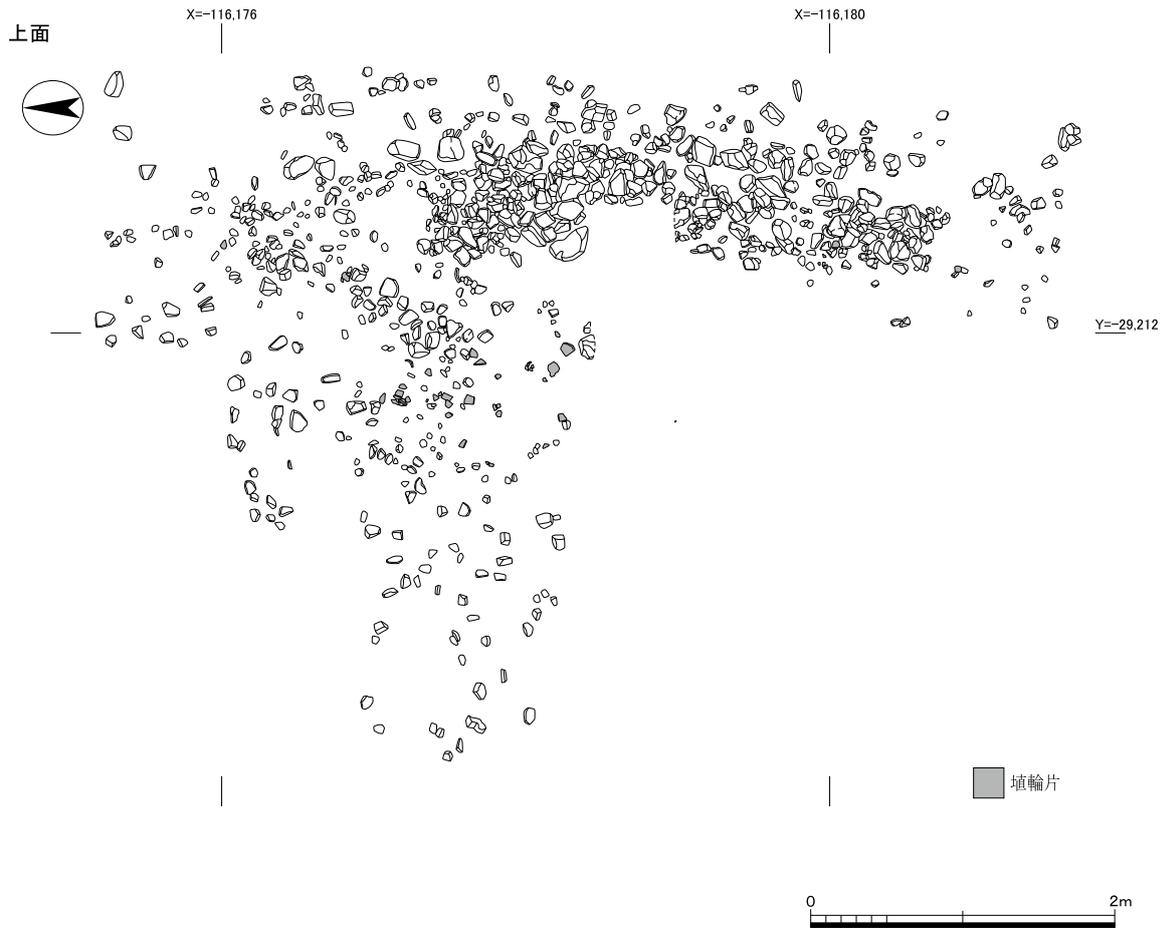


图12 集石1 実測図 (1 : 50)



である。埴輪の周囲に埴輪の倒壊状況を示さないことから、埴輪検出面も後世の削平を受けていると考える。

埴輪列掘形には埴輪を据える場所（埴輪1・2・12・13・15）に約0.1m掘り下げた円形の凹みがあるものがある。埴輪の天端の高さを掘形の深さによって調整したものと思われる。溝底を埋めて埴輪を高く据えている箇所（埴輪4～9）が見られる。また埴輪が検出できなかった箇所が2箇所あり、その部分は埴輪列掘形底にはピットが掘られていた。埴輪2と3の間は溝底より0.1m、埴輪7と8の間は溝底より0.4m深く掘られていた。木製樹立物などの痕跡である可能性もある。しかし、埋土内に明確な層の区分はできなかった。

#### 集石1～3（図12～15、図版3～5）

埴輪列の南側に位置する墳丘北面斜面上で、東西帯状の集石1～3を検出した。集石を構成する礫は丸みを帯びて、大きさは拳大から人頭大までである。石質はチャートや砂岩が主体で、後に述べる1石を除いて小畑川流域の川石と推察できる。

西端の集石1は地山が盛り上がる墳丘基壇北西隅部で検出した。集石1上層は他の集石と異なり、南に少し回り込むことから墳丘北東隅部を示唆している可能性がある。上層からは埴輪片の他に、6～7世紀にかけての須恵器小片を検出しており、上層は転落石である可能性が高い。転落石と考えられている石を除去した下層はやや大きめの礫を敷き、西に突出する。東側は集石2との間が攪乱などによって途切れているが、墳丘北西隅部の

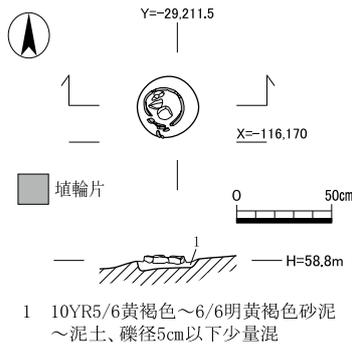


図14 集石2西部上面実測図（1：50）



- 1 7.5YR5/6明褐色砂泥 微砂主~泥土、礫径5cm以下少量混(埴輪据付溝埋土)
- 2 10YR4/6褐色泥土、礫径3cm以下<<少量混(埴輪内堆積土)
- 3 10YR4/6褐色泥土 粘質、礫径3.5cm以下多量混
- 4 10YR5/4黄褐色砂泥~泥土、礫径5cm以下多量混 径3cm以下主体
- 5 7.5YR5/6明褐色砂泥~泥土、礫径30cm以下多量混
- 6 7.5YR4/6黄褐色砂泥~泥土、礫径1cm以下中量混
- 7 10YR5/6黄褐色泥土、礫径1.5cm以下中量混 1cm以下主体

图15 集石2西部下面実測図 (1 : 50)



1 10YR5/6黄褐色～6/6明黄褐色砂泥～泥土、礫径5cm以下少量混

図16 埴輪16実測図 (1:40)

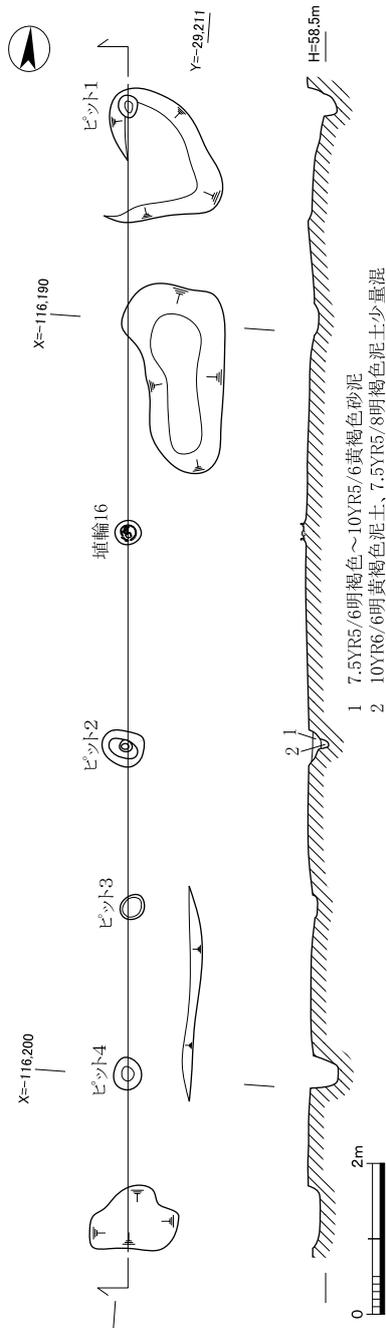


図17 ピット列1実測図 (1:100)

葺石を形成していた可能性がある。

集石2は東西13mで、東西幅約1.5m、厚さ約0.2mを測る。東端は地山がやや高まり途切れている。集石検出時の図14と転落石などを取り外して整理した下層図15と比較してみると、上層は北の埴輪列付近まで落石による比較的大きい石が散乱しているが、下層は比較的大きい石を東西方向の裾部に充て、その上に小石を詰めたようにみえる。しかし、不定形で整然とした裾石列を形成しないので、下層も上部の重圧や孕みなどによって北側にずれ動いている可能性もある。また、集石2の断面図にあるように約0.1m凹んだ地山の上に黄褐色系の粘質土が堆積しており、粘土で整地したうえで葺石や裏込め石を詰めた可能性がある。なお、下層の集石から鈹物質の人頭大の石を1個検出している。

集石3は中央部の集石2の東端の南側で検出し、集石2より0.25m高い位置で検出した。傾斜が集石2に比べて緩く、やや大ぶりの礫で構成されている。整然と並ばないが、地山直上に張り付いており葺石の可能性はある。

集石2・3の下層上面には埴輪片を集中して検出した箇所がある。埴輪片は集石帯を超えて平坦部に及んでいるところがある。これらの埴輪片は円筒埴輪の口縁部を含む埴輪上部の破片が主である。上段の埴輪列や葺石の崩落に伴う可能性がある。また、集石3の葺石上面や北東部に残存する埴輪列を越えて堆積した墳丘流出土層から形象埴輪片を多く検出していることが注目できる。

埴輪16とピット列1 (図16・17、図版6) 墳丘西側で原位置を保つ円筒埴輪 (埴輪16) を1基検出している。埴輪の残存高は4cmである。地山に直接据え付けてあり、埴輪底部が全周する。径0.4mの据え付け穴がある。しかし、据え付け穴周囲に倒壊した埴輪片がないことや、北側の埴輪列で見られた埴輪列掘形の痕跡を検出していないので、周囲が削平を受けているものと考えられる。また、この埴輪の南北に直線状に並ぶ径約0.3mのピットを検出している。北側埴輪列掘形底に穿ってあった穴に似ている。深さは揃わないが、北側埴輪列と同じ0.6mの倍数ではほぼ並ぶ。木製樹立物などの据え付け穴である可能性がある。

溝1直上埴輪散布面

溝1

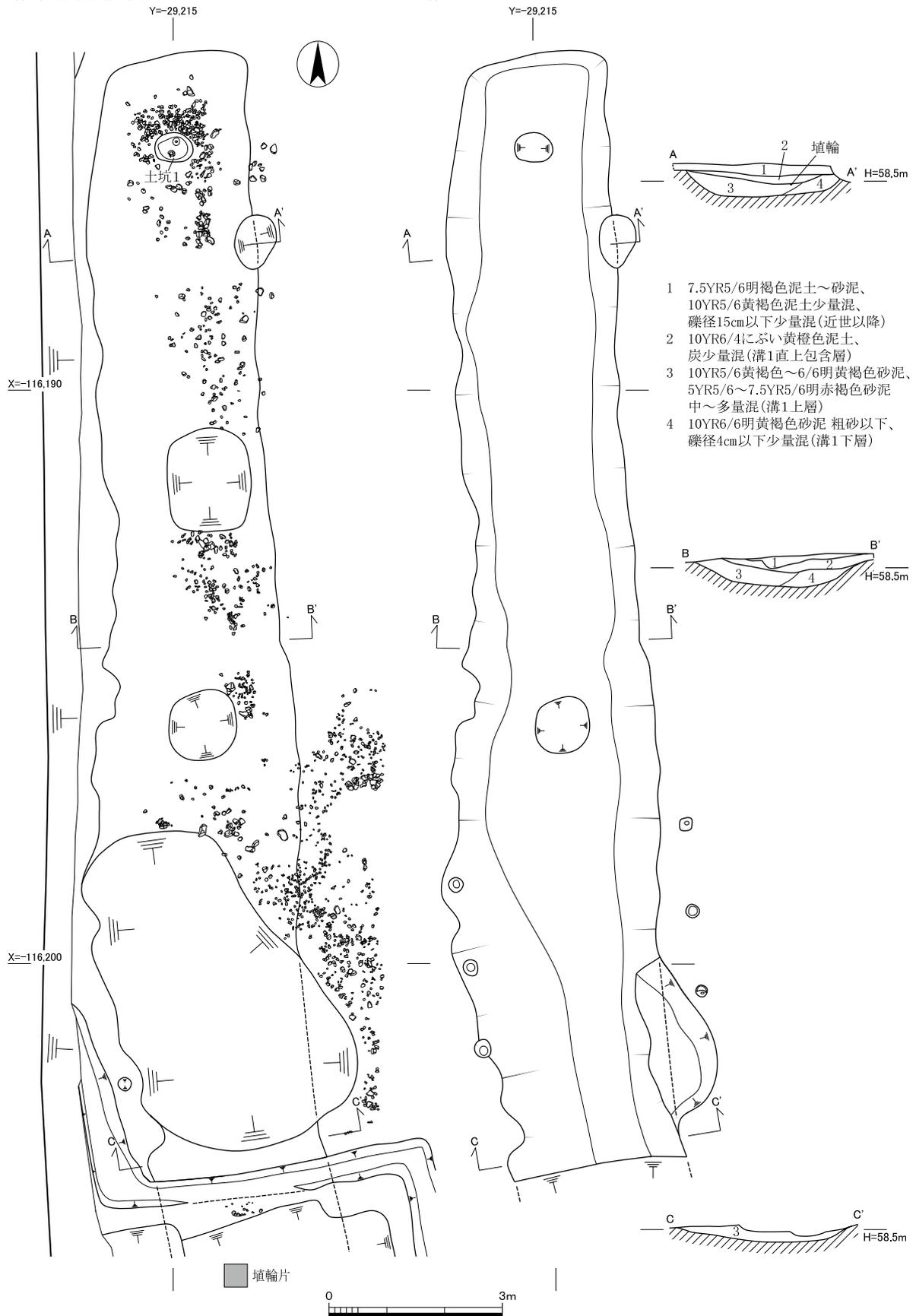


図18 溝1及び直上埴輪片散布面実測図(1:100)

溝1（図18、図版6） 墳丘西側のテラス状平坦面に埴輪片と小礫が南北に点在しながら帯状に散布していた。この埴輪片散布面下ではほぼ重複する南北方向の溝1の輪郭を検出した。

溝1は幅3m、深さ0.3mを測り、墳丘北西隅に該当する西に延びた高い地山面の南側から掘られていた。溝内北部では最下層に礫を含む明黄褐色砂泥が溝東肩にかけて堆積し、その上から均質な黄褐色砂泥が覆うように堆積していた。また、南部の溝内には北部にあった明黄褐色砂泥が消滅し、黄褐色砂泥だけが堆積する。溝底では埴輪片を少量検出している。溝1の埋没後に平坦面の東側から浅い凹みにかけて埴輪小片・礫が散布しており、埴輪片が東側から崩壊して堆積した状況を示す。埴輪片は2～4cmの円筒埴輪小片が主で、礫も墳丘北側で検出した集石帯の礫より細かい。また、南半では礫が少ないのが特徴である。

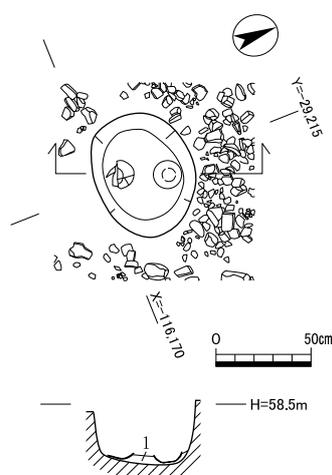
埴輪片・礫が散布する面上には埴輪片と礫を含む墳丘流出土と考える明褐色泥土が堆積しており、その上に染付を含む筍栽培の土替えと考えられる褐色系土が堆積していた。この堆積層の範囲は溝西肩まで及んでいないので、溝西肩上部は削平を受けている可能性が高い。

また、調査地南端は大きな攪乱が存在するが、調査区南壁攪乱底に厚さ0.1m、幅0.5mの溝底堆積層と同じ堆積層が溝延長線上に残存しており、溝が調査区外に延びる可能性を考えている。

土坑1（図19、図版7） 溝1北端付近の中央で検出した径約0.5m、深さ約0.3mの円形土坑である。この土坑は溝1埋没後に成立していた。土坑底から平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えられる瓦器碗2個を検出している。遺構の性格は不明である。

柱列1・2（図20） 真北から西に振れる並立する2列の南北方向柱穴列である。いずれも南北2間の柱穴で、ピットは径約0.2m、深さ約0.2mを測り、6基検出した。南北方向の柱間は1.5mで、東西方向は4mである。小規模の建物の可能性もある。東西方向の南側中央部は攪乱のため不明である。北側の中央部分は確認していない。埴輪片が散布した時期よりは古い。出土遺物は西側中央ピットから埴輪1片が出土している。

落込み1（図21、図版7） 前回調査報告書で「調査区の南部葺石の下層で検出した。それぞれ



1 10YR5/6黄褐色泥土、礫径5cm以下少量混

図19 土坑1実測図（1：40）

一辺約1.5～2.0mある。埋土は明褐色粘土層などで、表面に埴輪の小片が混入する。葺石を据える時の掘形などが考えられるが、葺石の下層のため、そのまま埋め戻した」とする「土坑9・10・13」を完掘した<sup>1)</sup>。しかし、「土坑10」の東延長は近世以降の土師器や古代の讃岐産瓦の入った石が詰まった攪乱であり、古墳の南限を示すものではない。また、その他の土坑も部分的な浅い凹みで、今回調査の東側まで延長しなかった。これらの土坑の東側は深さ0.1～0.2mの平坦な落込みとなり、埋土中から小礫少量と埴輪片少量を検出した。この落込みの堆積層は前回調査報告書では「竹林盛土」とされている層で、葺石となる大きさの石は検出していない。西端から東側約1m、北端から南に約2.5mで攪乱に切られているため、規模は不明である。落込み東側を切る攪

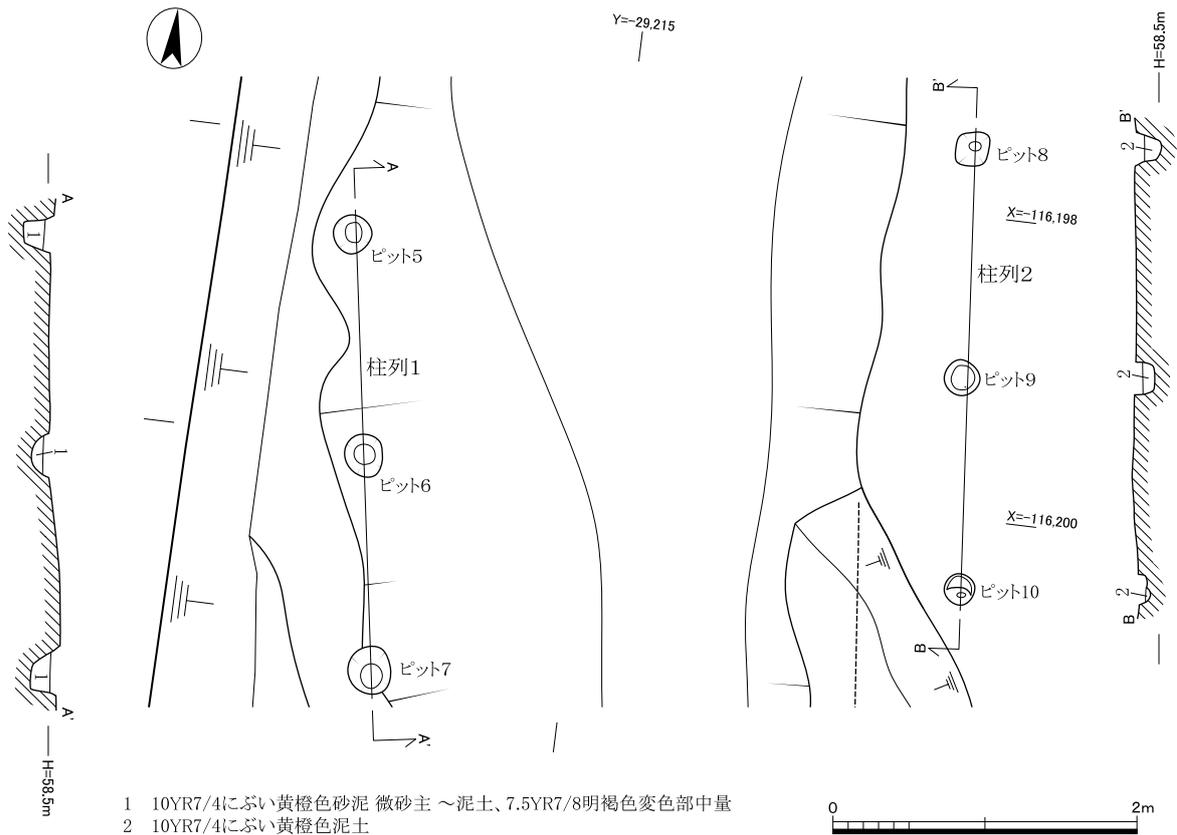


図20 柱列1・2実測図(1:50)

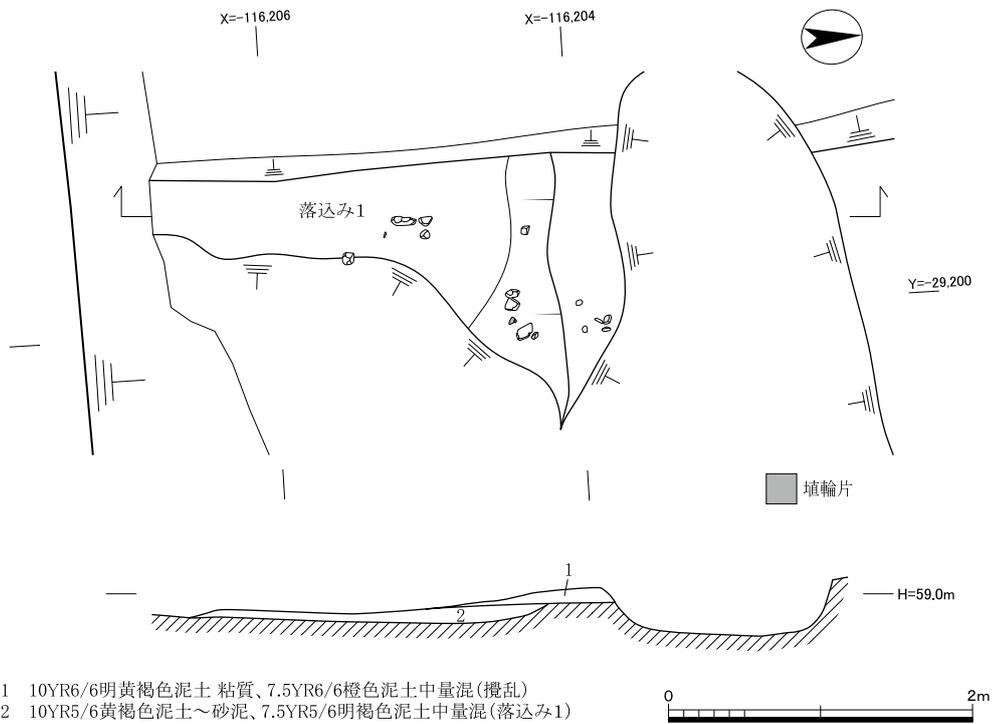
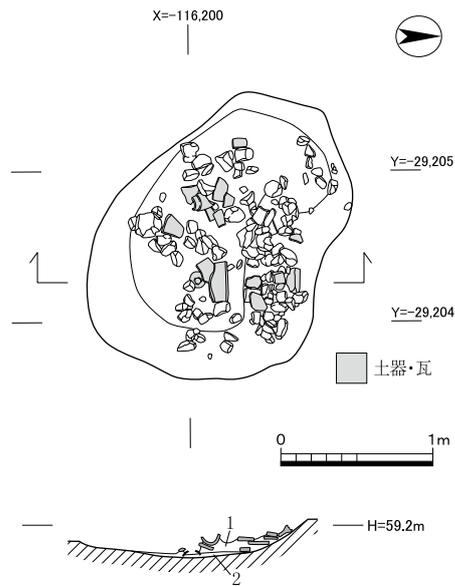


図21 落込み1実測図(1:50)



- 1 5YR5/6明赤褐色～7.5YR5/6明褐色砂泥～泥土、礫径20cm以下中量混
- 2 10YR6/6明黄褐色砂泥ブロック・2.5Y7/6明黄褐色砂泥ブロック相互混入、軟質

図22 土坑2実測図(1:50)

註

- 1) 尾藤徳行『長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所  
2014年

乱東肩の標高が59.0mであり、この落込み底の標高58.7mより高いことから、攪乱を超えて東に延長する可能性は少ない。また、西側平坦面より約0.2m高い。

土坑2(図22、図版7) 調査区南半の攪乱底標高59.2m地点で検出した、東西幅約2m、南北幅約1.5m、深さ0.2mの不定型な土坑である。埴輪片の他に多量の讃岐産軒平瓦・丸瓦や時期不明の土器壺などが出土した。しかし、棧瓦片・ガラス片なども共伴しており、竹栽培の際に上がった遺物をまとめて人為的に埋め戻したものである。讃岐産瓦はこの土坑以外に竹栽培の際に盛られた盛り土や遺構南西・落込み1北に掘られた近世以降の攪乱溝底からも検出している。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は整理箱にして36箱である。内訳は大部分が埴輪類である。その他古墳時代後期（6～7世紀）の須恵器片、平安時代後期の讃岐産軒平瓦・平安時代後期から鎌倉時代にかけての瓦器椀などが少量であるが出土した。また、文化財保護課による試掘トレンチと前回調査で出土した遺物も合わせて報告する。

### (2) 埴輪類

**円筒埴輪（1～38）**（図23～26、図版8～10） 1～16は原位置を保った円筒埴輪底部である。1～15は墳丘北側の埴輪列を構成し、西から順に番号を振った。16は西側で検出した原位置を保つ円筒埴輪底部である。また、弧帯文を巡らせる可能性がある円筒埴輪上部や家形埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪も出土しているが、小片であり原位置を保ったものはない。普通円筒埴輪の胎土は長石・石英・砂などを含み、色調は暗褐色から橙色。焼成は硬質のもの（13）から軟質のもの（10）まで存在する。表面に黒班が表れていない個体（12・13）もあるが、胎土内部の芯はすべての個体が黒色である。表面の黒班は片面に付着する。すべて野焼き焼成によるものと考える。

表3のように原位置を保つ円筒埴輪は、底部の口径約16～21cm内外、器厚は約1.2cmである。底部から一条目突帯上端までの高さは12～14cmである。少量であるが二段目に対向する円形の透かし穴の一部が残存しているものもある。円筒埴輪底部には垂直に立ち上がるものと、やや外側に開くものがある。

粘土紐で輪状に積み上げた痕跡が内面に残るが、多くは指オサエや指による縦方向の長いナデによって消されている。最下層の粘土紐は平均高さ約4cmで、その上に積み上げる粘土紐は約3cm

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代前半	円筒埴輪、形象埴輪、石		円筒埴輪38点、形象埴輪11点、石1点		
古墳時代末期	須恵器		須恵器3点		
平安時代後期以降	土師質土器、瓦器、瓦		土師質土器2点、瓦器2点、瓦3点		
近世以降	染付、焼締陶器				
合 計		38箱	60点（14箱）	0箱	24箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

である。底部内面には指圧による凹みが著しく付着するものが多い。また、内面底には縦方向に指（おそらく親指）で粘土を押し下げた痕跡が、幅約1cmで重複しながら一周廻るもの（11）がある。底には板に乗せた痕跡があり、平坦面をなす。また、内面底端には内側にはみ出た粘土をヘラで削った痕跡があるもの（12）がある。

底部外面成形には、指ナデや指オサエの痕跡しか見られないものの他に、幅約4cmのハケ工具による縦方向の下から上の密なタテハケを施したもの（1・4・13・14）や、観察者から見て右下から左上方向のナナメハケを全面に施し、一部はヨコハケからナナメハケに変化させて施しているもの（11）がある。また、底部外面にも2次調整のヨコハケを片面だけ軽く施したもの（3・8・11）がある。そのなかにはB種ヨコハケの静止痕かと思われるものが11で確認できるが、全周せず部分的に施されている。内面には右から左斜め方向や右から左へのヨコハケを有するもの（13・14）や、タテハケを有するもの（1）がある。2次調整の外面ヨコハケと内面のハケメが片側だけに付着している。

突帯部は下面を直角に作っているものが多い。端面が凹んでいるものもある。指だけでは直角が作れないので何らかの工夫があるものと考えられる。

北側埴輪列の内10は胎土が柔らかな白色で、器厚もやや薄い作りになっている。集石帯で検出

表3 埴輪観察表

番号	透し穴	黒班	刷毛目調整			底径 (長径) (cm)	厚さ (平均) (cm)	残存高 (cm)	突帯有無 及び高さ (cm)	色調(胎土)	焼成	備考
			内面	外面								
				1次	2次							
1						20.4	1.4	9.0	無	10YR7/4にぶい黄橙色		
2			///			17.4	1.4	11.0	無	10YR6/4~7/4 にぶい黄橙色		
3	有	有			≡	18.6	1.2	17.2	13.5	7.5YR7/4にぶい橙色 ~7/8黄橙色		
4	有	有				20.5	1.5	14.5	13.5	10YR7/6明黄褐色 ~7/3にぶい黄橙色		
5		有				17.8	1.2	13.0	無	10YR7/4にぶい黄橙色 ~7/6明黄褐色		
6						20.0	1.2	12.1	無	10YR7/6明黄褐色 ~7/8黄橙色		朝顔形か
7	有	有				20.1	1.4	10.4	無	10YR6/4にぶい黄橙色 ~6/6明黄褐色		
8		有			≡	16.2	1.2	13.0	無	10YR6/3にぶい黄橙色 ~6/6明黄褐色		
9		有		///		20.8	1.0	8.6	無	内側2.5Y7/3~7/4浅黄色、 外側10YR6/3~6/4にぶい 黄橙色		
10		有				19.5	1.0	15.7	13.5	10YR8/4浅黄褐色 ~8/6黄褐色	軟質	朝顔形か
11	有	有		///	≡	18.5	1.0	19.2	13.9	7.5YR7/6~6/6橙色		
12					≡	21.4	1.2	21.5	14.0	7.5YR7/4にぶい橙色		
13			/// ≡			17.4	1.2	20.6	12.5	7.5YR7/6橙色	硬質	
14		有	/// ≡			16.2	1.0	5.8	無	10YR7/4にぶい黄橙色		
15		有			///	20.0	1.2	5.7	無	10YR7/4~8/4 にぶい黄褐色~浅黄褐色		
16		有				17.0	1.0	4.0	無	7.5YR6/6橙色		

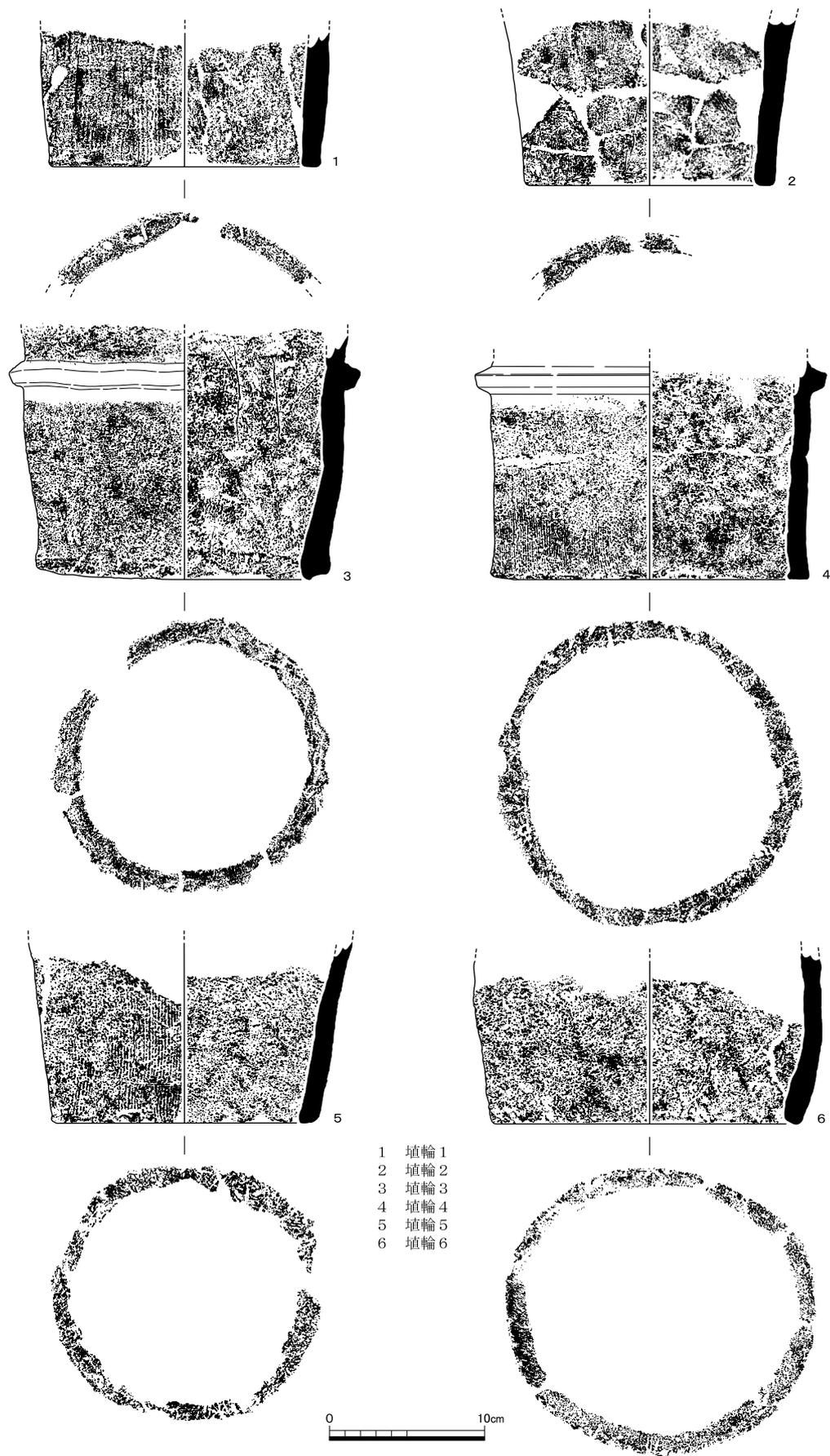
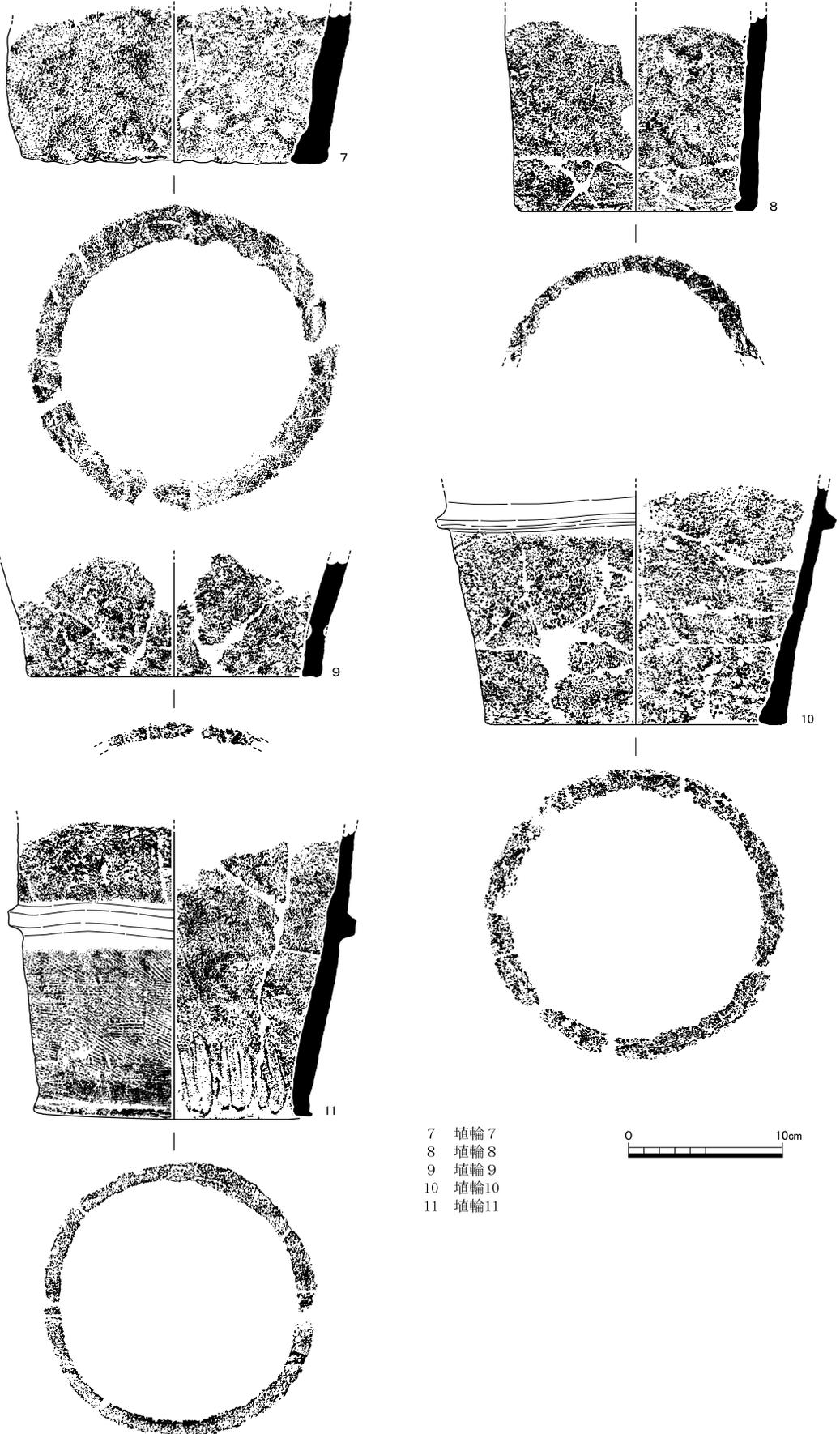


图23 出土埴輪実測图1 (1 : 4)



- 7 埴輪 7
- 8 埴輪 8
- 9 埴輪 9
- 10 埴輪 10
- 11 埴輪 11

图24 出土埴輪実測图2 (1 : 4)

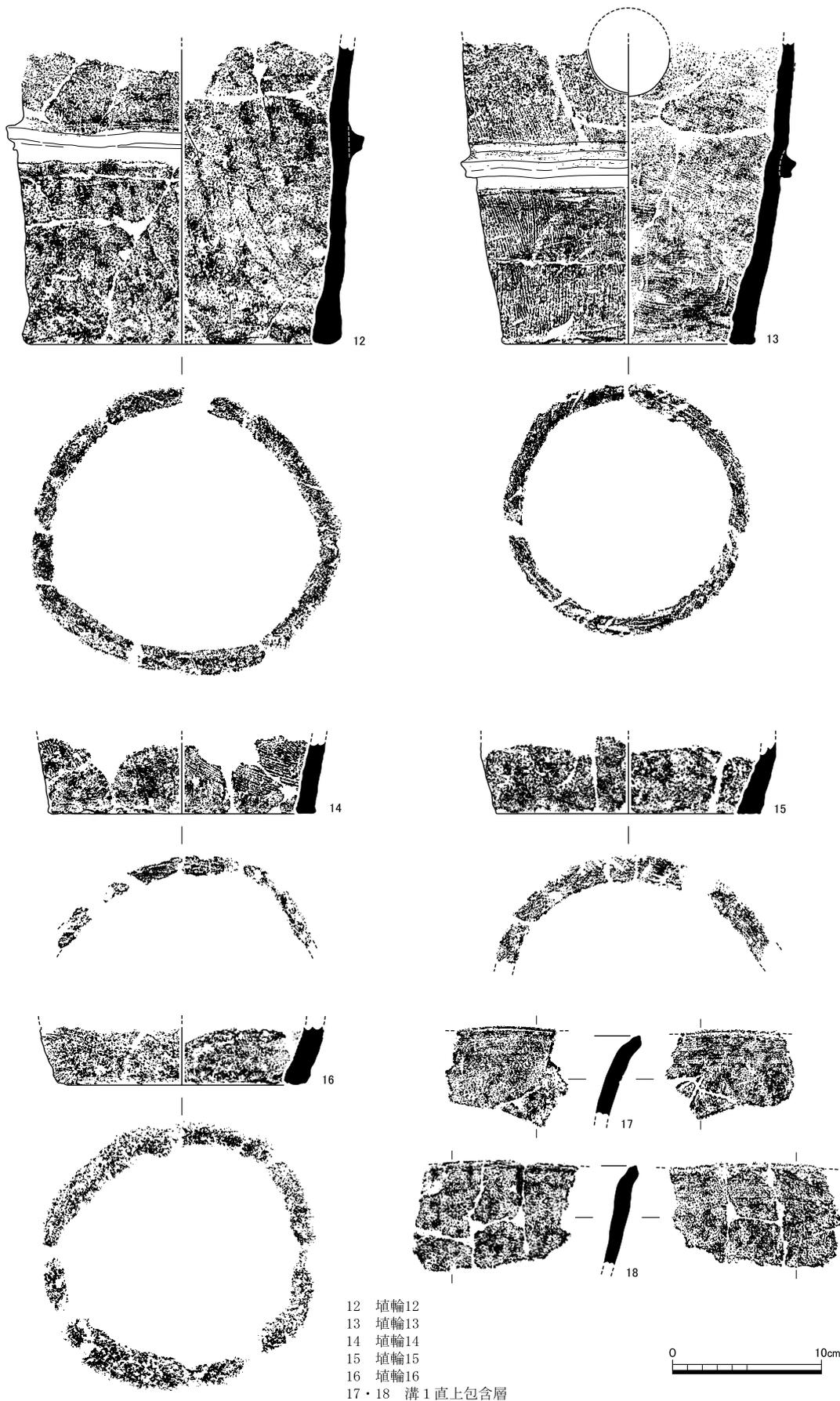


图25 出土埴輪実測图3 (1:4)

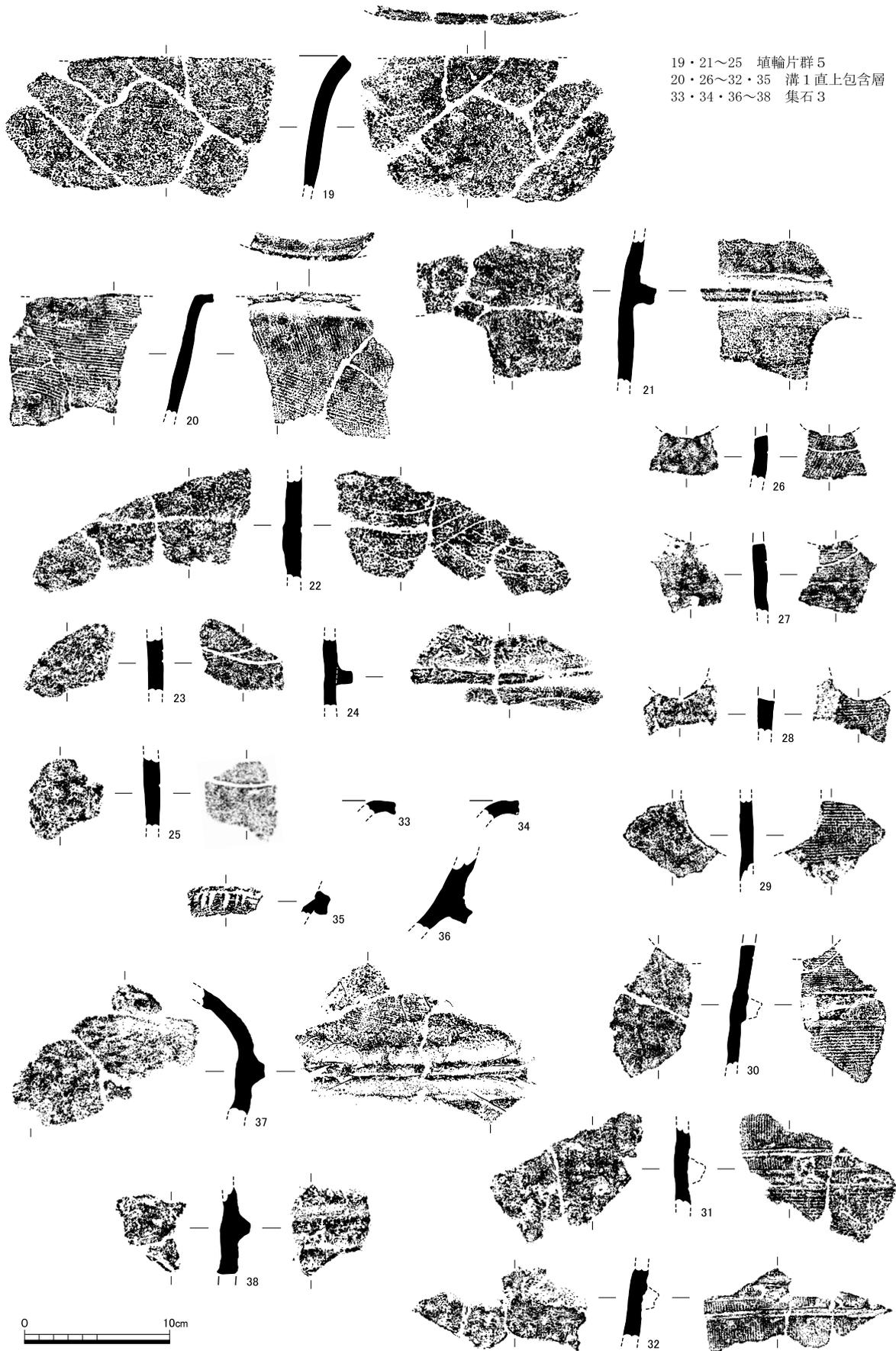
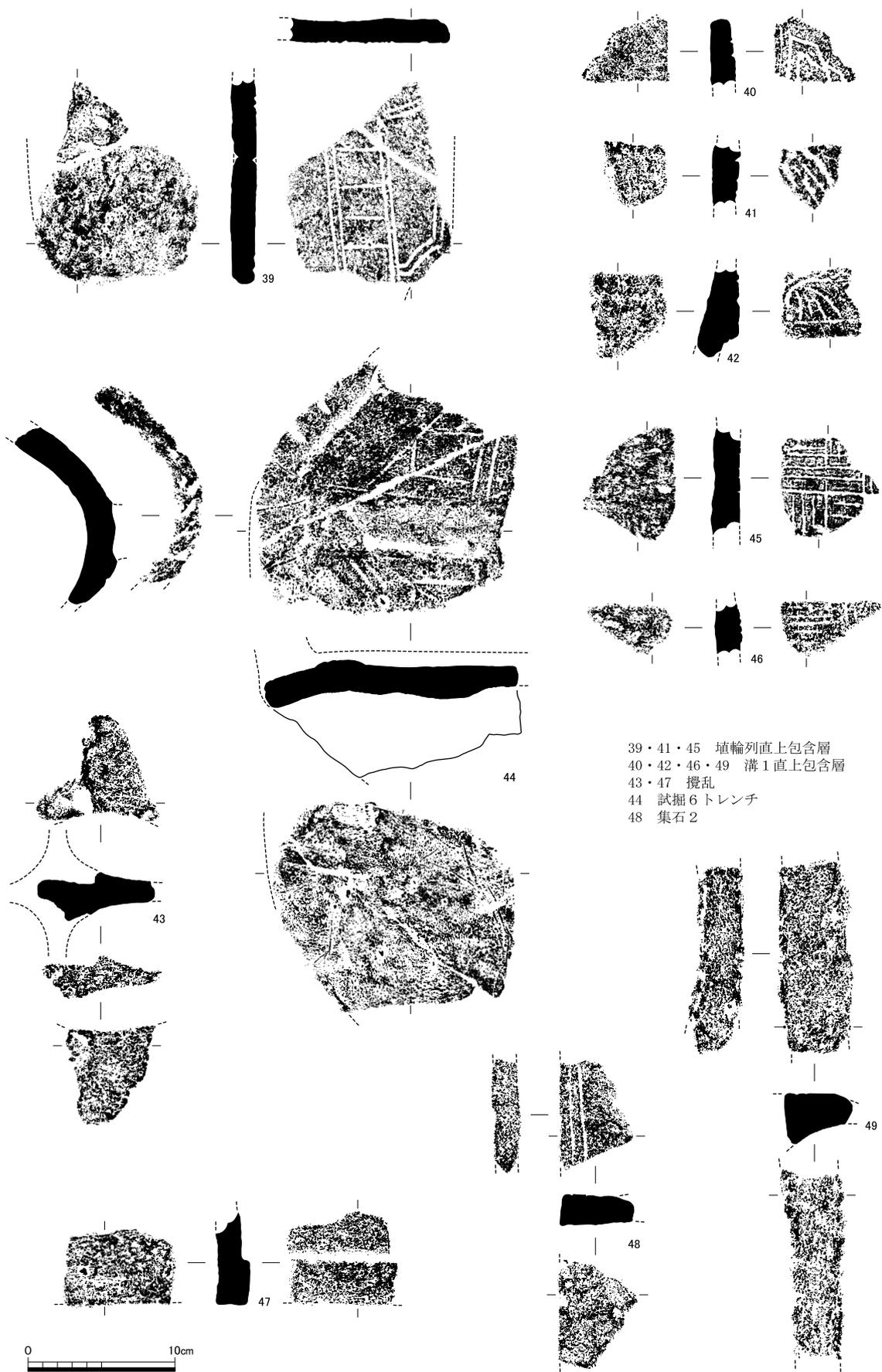


图26 出土埴輪実測图4 (1 : 4)



39・41・45 埴輪列直上包含層  
 40・42・46・49 溝1直上包含層  
 43・47 攪乱  
 44 試掘6下レンヂ  
 48 集石2

图27 出土埴輪実測图5 (1:4)

した朝顔形円筒埴輪口縁部破片の胎土と類似している。胎土芯は黒色である。原位置を保つ埴輪の中ではこの埴輪だけ胎土が異なり、朝顔形埴輪底部の可能性はある。

円筒埴輪片の口縁部（17～20）は、くの字状（17・18）の他に、緩やかに外反するもの（19）と端部でL字状に折れ曲がるもの（20）に分類できる。いずれも端部に面を有する。これらの口縁はヨコハケを施した後、端部をナデで調整する。17は胴部外面に鋭角沈線の中に二等分する沈線を入れている。

21～25は口縁部の19と同一個体と考える胴部である。円形の透かしと3条の沈線を単位として、扇形を上下相互に展開する帯弧文と酷似した箇所がある。模様部のヨコハケがナデによって薄く消されている。突帯は端正なコの字状に作る。

26～30はいずれも円形透かし穴をもつ破片である。外面ヨコハケ上から沈線で透かし穴の縁取りを施しているもの（26・27・30）とないもの（28・29）がある。これらの透かし穴をもつ破片は西側南北溝堆積層直上の埴輪散布地から出土した。

30～32はいずれも突帯の剥離した破片で、胴部外面の剥離面上端と下端凹線の他に中央にヘラ状の器具によって凹線を引いているものである。中央の凹線は突帯貼り付けの目印となるとされており、できるだけ水平に突帯を廻らせようとした意図が感じられる。32は上端と下端の2条間の突帯部剥離部分に成形時のタテハケが明瞭に残る。これらの剥離面には突帯部が離れきらずに残り突出した箇所があり、突帯が剥離しないため何らかの工夫が伴ったものと考えられる。なお、30にはヨコハケの静止痕（B種ヨコハケ）と思われる縦線の痕跡がある。これらの破片は西側南北溝堆積層を覆う流出土層から出土した。

33～38は朝顔形円筒埴輪である。肩部上半と口縁部が出土している。胎土は密で、器表がクリーム色である。表面に黒斑は見られないが、芯は黒色である。口縁部外面に突帯を廻らす（36）。胴部の肩に丸みを有し（37）、胴部に円形の透かしを入れている（38）。口縁部外面の突帯部剥離面に刺突もしくは連続するヘラによる痕跡が連続している例がある（35）。

**形象埴輪（39～49）**（図27、図版10・11） 形象埴輪片である。形象埴輪は小片で原位置を保つたものはない。家形埴輪、蓋形埴輪などがあるが、部位不明なものが多い。鱗部は、片側のみに沈線の縁取りがあるものは靱の可能性が高い。両面に沈線で縁取りした鱗は家形か蓋の可能性が高い。また、家形埴輪の裾部と考えられる埴輪片も多い。

39～42は靱などの形象埴輪であると考えている。大型の39の裏側には縦方向に剥離痕がある。

43は蓋天部クロス部分である。板状の粘土を組み合わせた接合痕が残る。両面の縁に2本の沈線を廻らす。

44は切妻式建物の逆U字状屋根端部である。端部に妻飾りを貼り付けた痕跡がある。屋根裏部分に棟木が付着した痕跡はないが、頂上に棟木を付けた痕跡がある。表面に直線の沈線による区画を描く。

45・46は屋根か壁の網代を表した家形埴輪片と考えられる。47～49は板状の部位で、家形埴輪の裾部か屋根先の可能性はあるが、小片のため詳細は不明である。

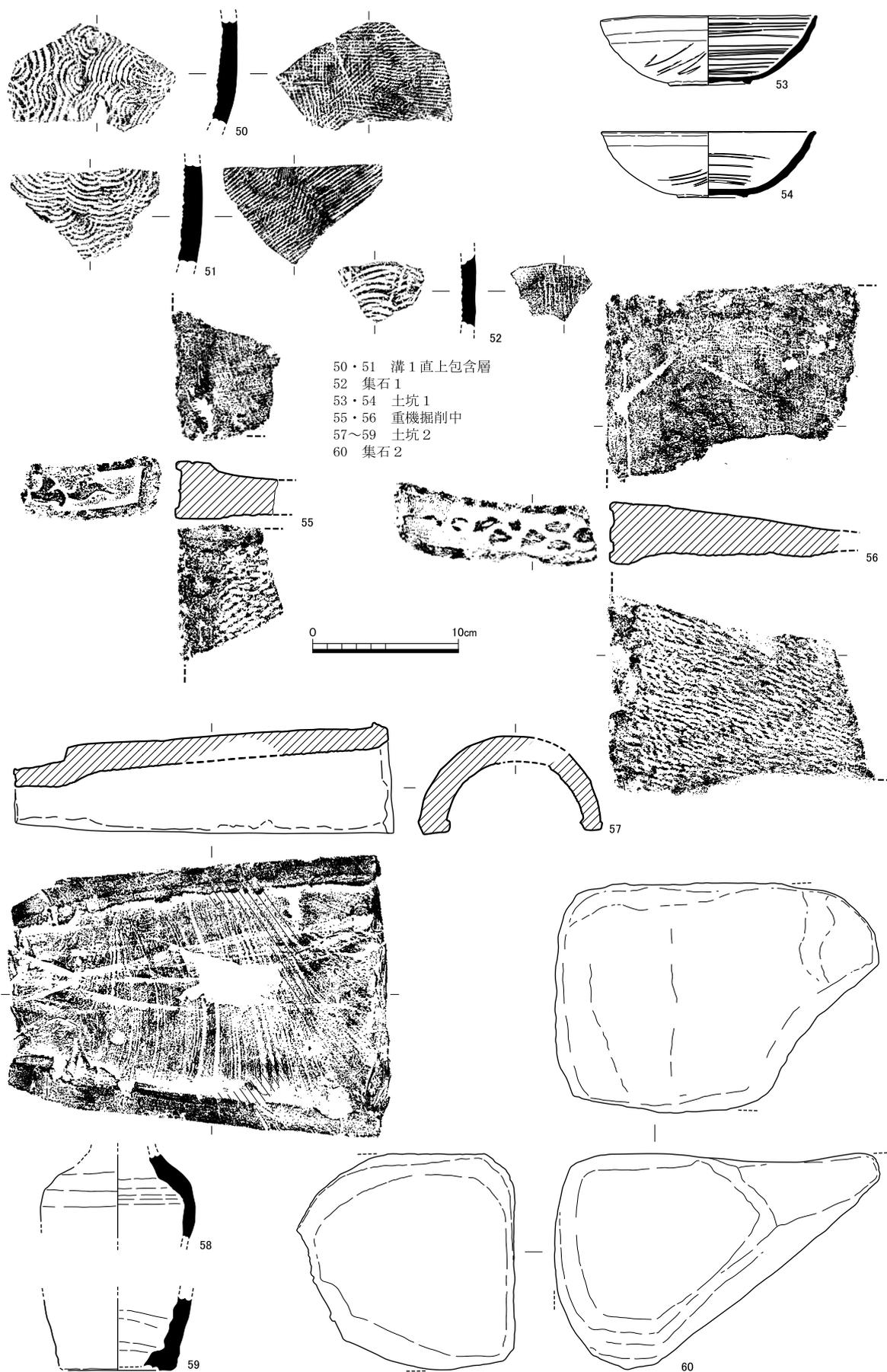


図28 出土その他の遺物実測図 (1 : 4)

(3) その他の遺物 (図28・29)

土器類 (50～54・58・59) 50～52は須恵器甕である。外面並行タタキ文、内面当て具の同心円文が残る。同一個体と考えられる。内面のナデケシがないことなどから6～7世紀の須恵器と考えられる。集石1と溝1埋没後の埴輪が散布する面に混じって少量出土している。

53・54は土坑1底部に置かれた瓦器椀である。53は完形で、54は約1/2残存していた。口径は同じ口径15cm。高さは53が4.9cm、54が4.6cmである。内面外面ともにミガキを施すが状態が悪く不明瞭である。口縁内面に沈線を施す。12～13世紀にかけての樟葉産であろう。

58・59は土師質土器壺肩部と底部である。土坑2から出土した。時期は不明である。

瓦類 (55～57) 土坑2やその南西部の近代以降の攪乱から出土した讃岐産瓦である。55・56の軒平瓦には凹面布目と凸面縄タタキ目がつく。焼成はやや甘く須恵質で、色調は淡灰色である。顎・上端部に横方向のヘラケズリを施す。瓦当面に類似する2種類の宝相華文を押す。

57は丸瓦である。内側に糸切の上に布目が被さった痕跡を残す。この軒平瓦と同文の瓦が香川県ますえ畑瓦窯で検出されており、京都では六波羅蜜寺で多く出土している。平安時代末の12世紀初頭と考えられている。讃岐産瓦は盛土と近代以降の溝底からも数点検出している。

石 (60) 集石2の下層を構成する礫の中に混じていた頭大の岩石片である。石の片端面はほぼ正方形で、端部は丸みを帯びている。上面がやや凹む箇所があり人為的な加工の可能性もある。風化が激しく結晶質だけが露出しており、透明もしくは黒い結晶体の鉱物で構成されている。火成岩か変成岩であり当地周辺には産しない岩石である。比較的大型であることから裾石として使われていた可能性もある。



図29 出土その他の遺物

## 5. まとめ

今回の調査地は、古墳時代から室町時代の遺物散布地として登録されている上里北ノ町遺跡に含まれている。今回の発掘調査で、この遺跡内に古墳の存在が明らかになったことは大きな成果である。古墳は主体部を含め墳丘構造や規模については土取りなどの削平によって明らかにすることができなかったが、地山を削り出して墳丘基底部を形成していることが明らかになった。

### 古墳の規模・形状について

調査地北に展開する向日丘陵の寺戸大塚古墳などの前期古墳群については「自然の地形を巧みに利用して土木量を少なくする工夫は丘陵上に立地する前期古墳の特徴である」という指摘がある<sup>1)</sup>。墳丘基底部西側平坦面で検出した南北方向の溝1は、墳丘北側に廻らないので周濠ではないと考えられる。この溝が埋まった後に6～7世紀にかけての少量の須恵器片が埴輪片に混じって散布しており、古墳時代後期以降には溝が埋まっていた可能性が高い。東に突出した大原野台地の東辺を南北に切って区画形成している可能性が高く、墳丘基壇部西側の削り出し造作のために排出された掘削土を基底部の上に盛って墳丘を構築したと考えられる。

古墳は検出状況から方形墳とみられる。溝1が南に延長する可能性があることから、墳丘東端は現在攪乱や崖によって深く削平を受けているため不明であるが、一辺は30mを超える可能性がある。調査地南部は、現状ではスロープ状に南の善峰川に向かって下がっているが、図7に示した明治42年の地形図では台地東側突出部に南部に延びる平坦なスペースが存在していたので、他に前方後円墳・後方墳の可能性も考えられるが、地形が変わった現状では不明としなければならない。なお、近辺には30m級の方墳は存在しない。

### 古墳の時期について

今回の調査で、古墳の時期を判断できる資料は埴輪のみである。完形に復元できるものはないが、樹立していた円筒埴輪は、底径20cm前後と小型のものが多く、いずれも野焼き焼成によるものと考えられる。焼成方法からは、須恵器出現以前の5世紀初頭より古く4世紀末までさかのぼる可能性がある。

一方、円筒埴輪片に製作過程の2次調整の段階で、ヨコハケにわずかな静止痕（B種ヨコハケ）が認められるものがある。さらに粘土紐を基底部としているなどの特徴があり、製作技法からは5世紀前半まで降る可能性がある。

したがって、この古墳の築造年代は4世紀末から5世紀前半までの間と考えるのが妥当であろう。出土した形象埴輪に人物や動物が認められないことも、これを傍証する。

### 古墳の立地について

調査地西側は木津川・桂川・宇治川を眺望でき、弥生時代から集落が連綿と続き古墳時代に入って前期古墳が点々と築かれる淀川流域・木津川流域の曲折点に位置する。調査地からは南東方向に大和を、南方向に天王山と男山に挟まれた淀川下流まで眺望できる。また、大和から発する旧山陰道（丹波道）は老坂峠を経て丹波国・日本海に抜ける最短距離の古道であり、多少のルート

の変更はあろうが、弥生時代から古墳時代にかけても古道が調査地の北か南に存在したはずである。少なくとも古墳時代前半の陸路と水路の要衝に築かれた古墳であると総括できる。

#### 出土した讃岐産瓦と寺院について

なお、今回の調査では讃岐産瓦が出土したが、確実な遺構に伴うものではない。竹栽培のための客土として付近から持ち込まれた可能性が高い。しかし、調査地である小字「堂ノ上」南端に現存する「地藏寺」は南東に存在した「阿弥陀寺」を合併したとされ<sup>2)</sup>、調査地南の石見村「法泉寺」は「堂ノ上」の北西に隣接する小字「橋樹山」から応仁・文明の乱で焼かれて現位置に移転したという伝承を持っている<sup>3)</sup>。『三鈷寺文書』に近辺の散在庄園である「富坂庄」に「陸奥守橋前司殿」橋則光の私領が平安時代中期にあり、彼が一堂を建立して仏像を安置し、この庄の地の利をもって「仏聖燈油」に充てたとされたが、彼が建立したのは「二条阿弥陀堂」である<sup>4)</sup>。彼は清少納言の夫と目される人物で、11世紀前半までに亡くなっている。今回検出した12世紀前半とされる讃岐産瓦とは隔たりがあるが、調査地西側の小字名が「橋樹山」であることや、調査地の小字名が「堂ノ上」であることから、調査地近辺に平安時代の仏堂などが存在した可能性もある。

調査に関しては和田晴吾（立命館大学）、岩崎 誠（公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター）、中塚 良・梅本康広（公益財団法人向日市文化財センター）、広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）、都出比呂志（大阪大学）、石野博信（兵庫県立考古博物館館長）の各氏、埴輪に関しては高橋克壽（花園大学）、一瀬和夫（京都橋大学）、宇野隆志（奈良県立橿原考古学研究所）、原田昌浩（立命館大学院）の各氏のご教示を受けた。また、地元の小野良弘氏、大原野歴史同好会の小野嘉巳氏には調査にあたってご配慮いただいた。各氏にあらためて感謝する次第である。

#### 註

- 1) 都出比呂志「古墳時代」『向日市史 上巻』向日市 1983年
- 2) 大原野小学校百周年記念誌編集委員会『創立百周年記念 大原野百年のあゆみ』京都市立大原野小学校百周年記念実行委員会 1973年
- 3) 京都市編入三十周年記念誌編集委員会『大原野』大原野自治連合会 1990年
- 4) 大山喬平『京都大学文学部博物館の古文書第9輯 浄土宗西山派と三鈷寺文書』思文閣出版 1992年

#### 参考文献

- 京都市『京都の歴史・第1巻平安の新京』学芸書林、1970年  
『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査－発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告－』京都市都市開発局洛西開発室 1972年  
長岡京市史編さん委員会『長岡京市史・本文編1』長岡京市 1996年  
京都市『史料京都の歴史 第15巻（西京区）』平凡社 1994年  
中山修一『長岡京・内と外』乙訓書房 1978年

中村修『乙訓の原像』 ビレッジプレス 2004年  
高橋克壽『歴史発掘9 埴輪の世紀』 講談社 1996年  
宇野隆志『平安京以前・古墳が造られた時代』京都市文化財ブックス第26集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2012年  
川西宏幸『古墳時代政治史序説』 塙書房 1988年  
都出比呂志『前方後円墳と社会』 塙書房 2005年  
一瀬和夫『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館 2005年  
上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』元興寺文化財研究所 1978年  
長岡京市埋蔵文化財センター『恵解山古墳第7次調査概報』長岡京市文化財調査報告書第50冊 長岡京市教育委員会、2007年  
岡内三真・和田晴吾・宇野隆夫「京都府長岡京市カラネガ岳一・二号墳の発掘調査」『史林64巻3号』史学研究会 1981年  
梅本康広「摂津・山城」『古墳時代の考古学2（古墳出現と展開の地域相）』同成社 2012年  
高橋克壽「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所学報第65冊 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2012年



# 圖 版





1 西調査区全景（北から）



2 東調査区全景（北から）



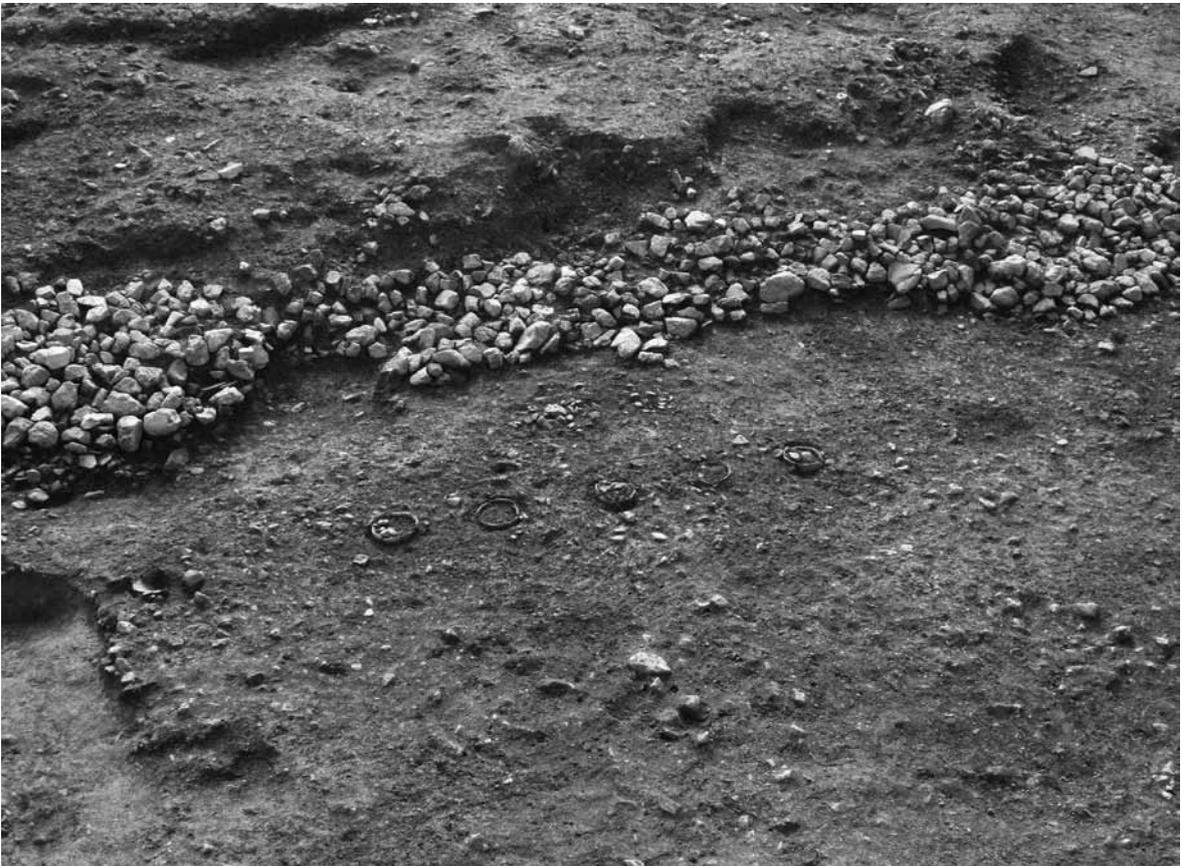
1 埴輪列 埴輪3～7 (北から)



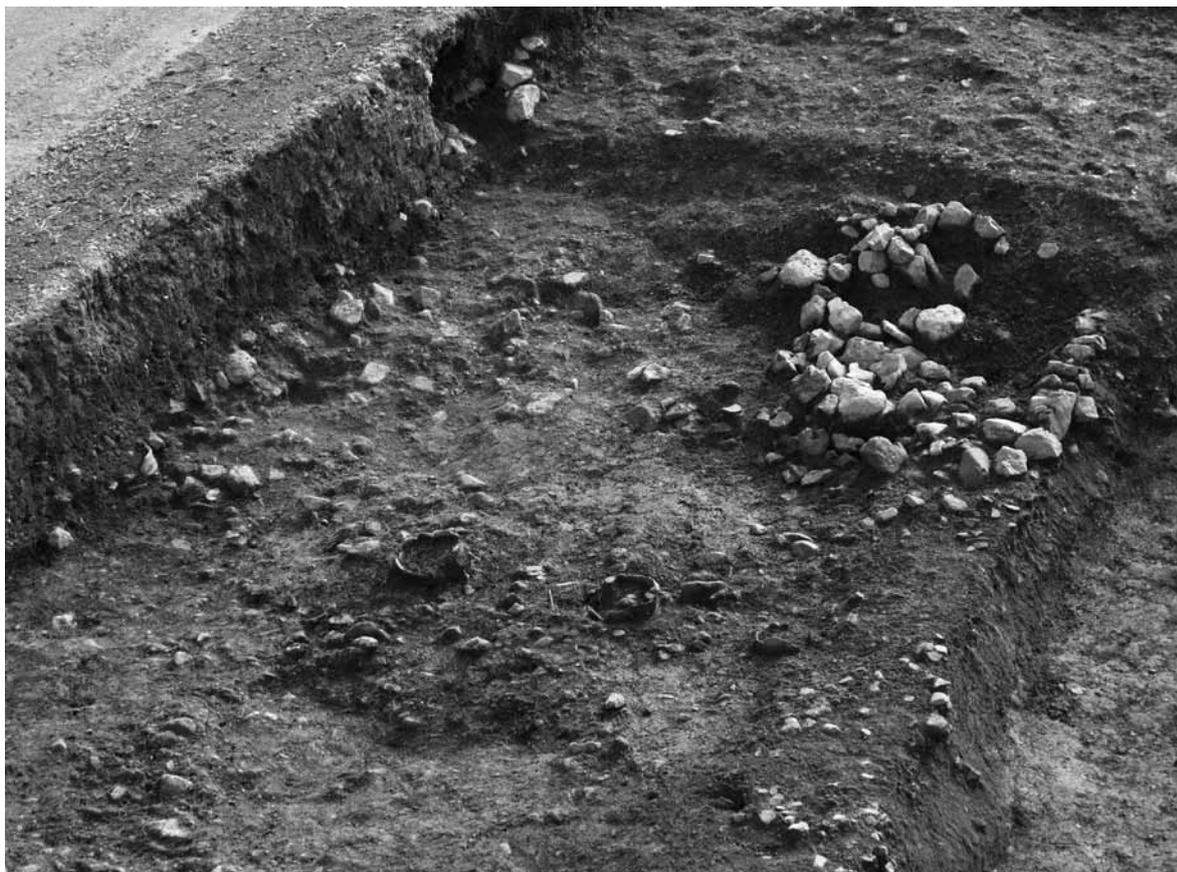
2 埴輪12及び西調査区東壁 (北西から)



1 埴輪列・集石1・2 (西から)



2 埴輪列・集石2西部 (北から)



1 埴輪列・集石2東部（北から）



2 埴輪列・集石3（北西から）



1 集石2 埴輪片混入状況（北から）



2 埴輪列掘形・集石2完掘状況（東から）



1 埴輪16 (北から)



2 埴輪16・溝1 (北東から)



3 溝1埴輪片散布状況 (北から)



4 溝1 (北から)



1 土坑1 (北から)



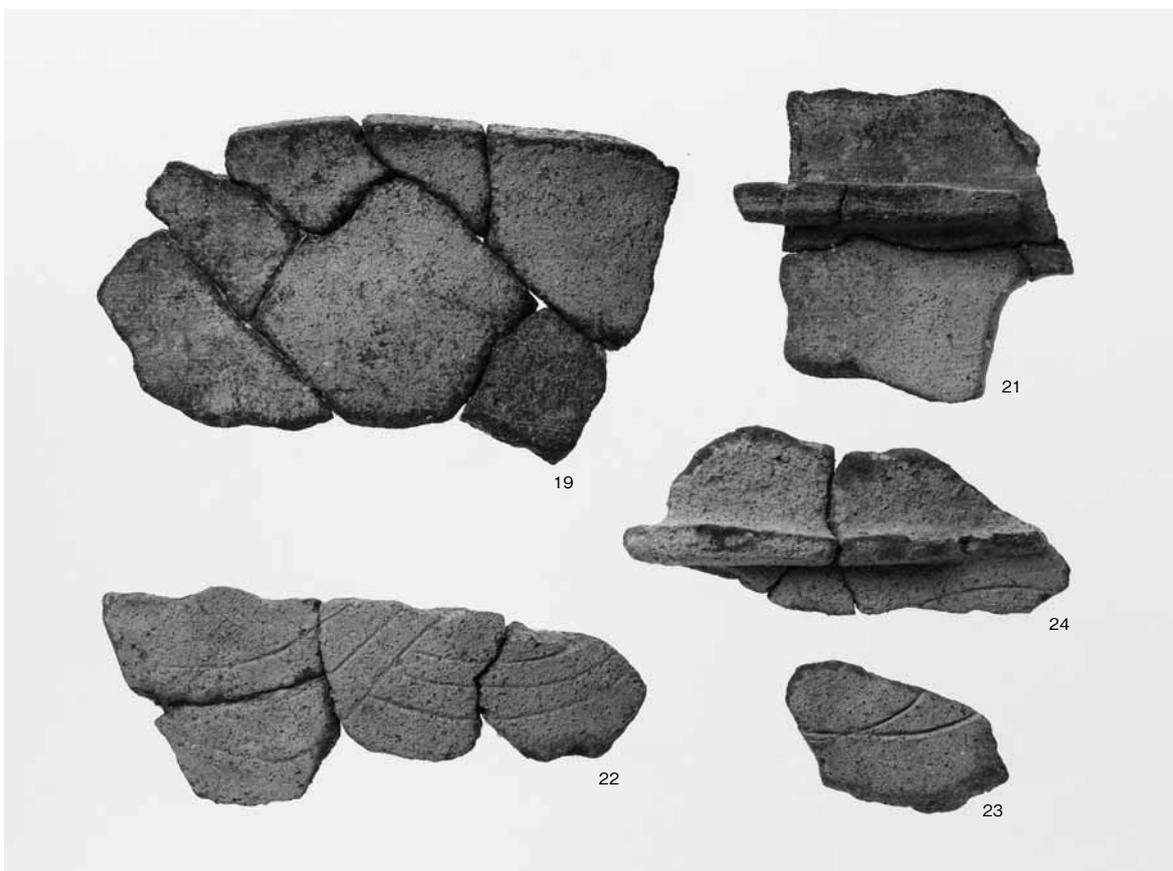
2 土坑2 (北西から)



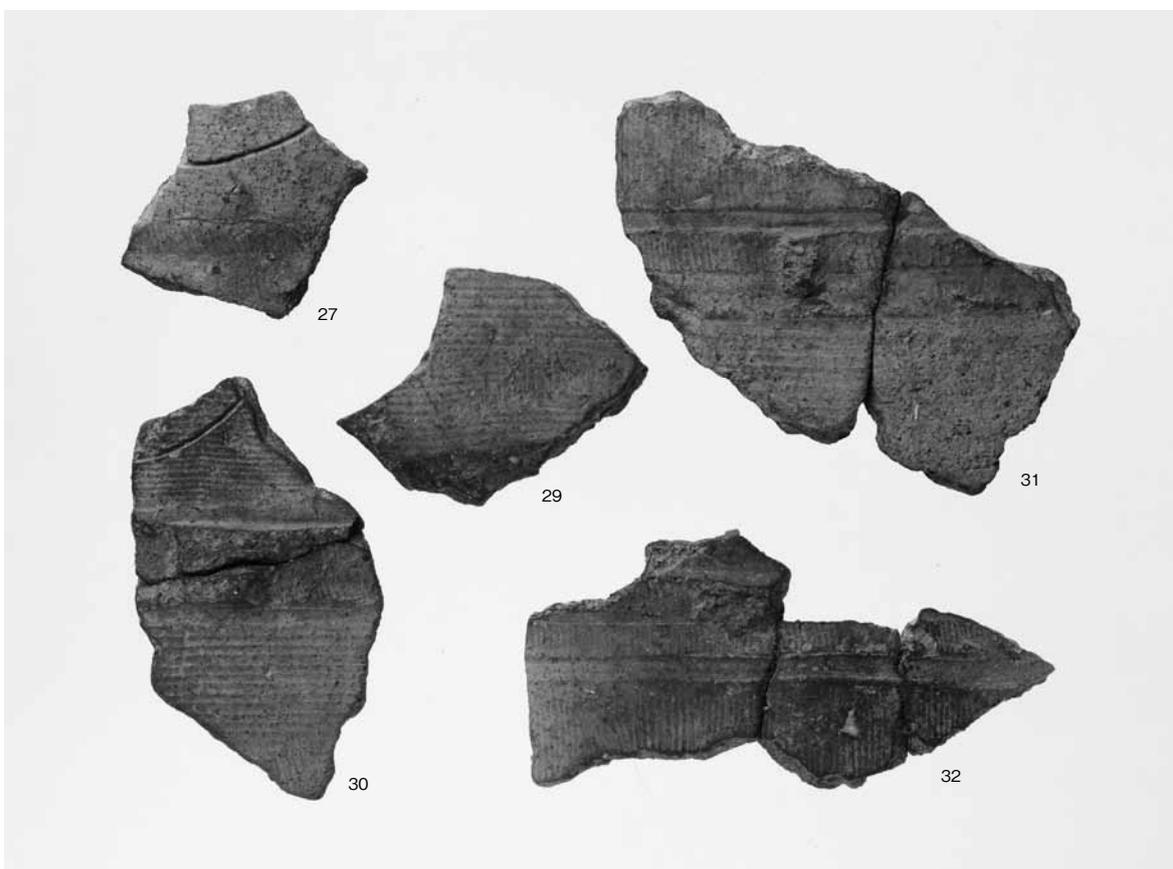
3 落込み1 (南東から)



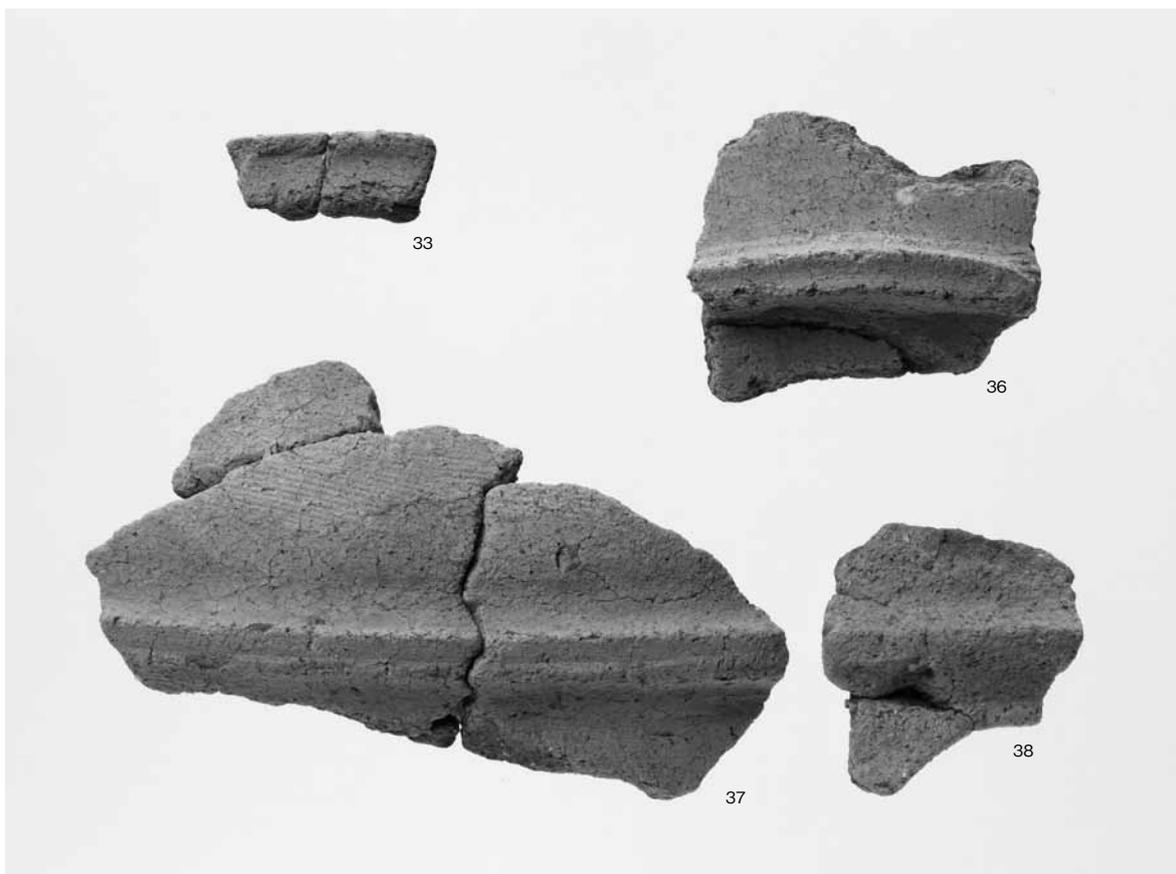
円筒埴輪



1 円筒埴輪 弧帯文



2 円筒埴輪 円形透し・突帯剥離痕



1 朝顔形円筒埴輪



2 形象埴輪



43



45



44



49



47



48

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうきょうほくへんしぼうはっちょうあと・かみさときたのちょういせき・どうのうえこふん							
書名	長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-12							
編著者名	東 洋一・津々池惣一・布川豊治・松吉祐希・南 孝雄							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区	26100	3	34度	135度	2014年10月 22日～2014 年12月26日	1,262m <sup>2</sup>	道路建設 工事
かみさときたのちょういせき 上里北ノ町遺跡	おおはらのかみさとみなみ 大原野上里南		1042	57分	40分			
どうのうえこふん 堂ノ上古墳	のちょうちない ノ町地内		1063	09秒	49秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡	都城跡	古墳時代	古墳	円筒埴輪、形象埴輪、石				
上里北ノ町遺跡	散布地	平安時代末 ～鎌倉時代	土坑	瓦器				
堂ノ上古墳	古墳							

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-12

長岡京右京北辺四坊八町跡・  
上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳

発行日 2015年3月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961